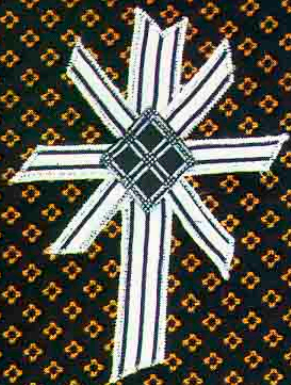
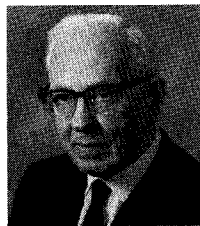
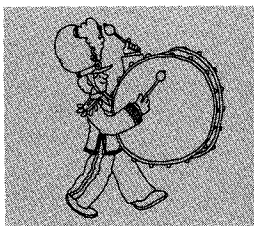
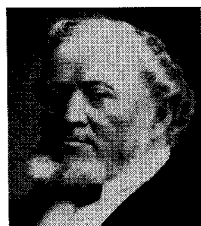


# 聖徒の道

12 1979





## 末日聖徒イエス・キリスト教会

### 大管長会

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

### 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト

### 顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア  
レックス・D・ピネガー  
ヒュー・W・ピノック

### 教会誌編集主幹

M・ラッセル・バラード・ジュニア

### 国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)  
キャロル・ラーセン (編集副主幹)  
ロジャー・ギリング (デザイナー)

### 「聖徒の道」

赤松成次郎 (翻訳部長)

## もくじ

救い主を生活の中心とする……………	スペンサー・W・キンボール……………	1
「ハックス君、あなたはイエス・キリストを信じていますか」……………	マリオン・D・ハックス……………	6
失くして得た宝物……………	キム・R・バーニンガム……………	7
対応する新旧両世界……………		10
会員伝道を行なうには……………	マービン・K・ガードナー……………	11
子供を信頼する……………		14
愛をもって人を責める……………	スペンサー・J・コンディール……………	17
「汝らが言うところを行わば」……………	ハリエット・S・ハルバート……………	18
ルカ伝……………		21
楽しいクリスマス……………		22
夜のこない日……………	マーベル・ジョーンズ・ガボット……………	24
おもちゃばこ……………		28
最後の神権時代における……………	ジョセフ・フィールディング・スミス……………	29
最初の予言者……………		
ただひとり歩調を合わせて……………	デビッド・ヒュー・バーリー……………	32
ジョセフ・スミスが……………	ウィリアム・G・ハートリー……………	35
若人に寄せた期待……………		
主にあって不可能なことはない……………	ダイク・ウォルトン……………	39
ローカル・ニュース……………		44

### 表紙の説明

フィリス・ルーチェ作の刺繍

### 聖徒の道 12月号

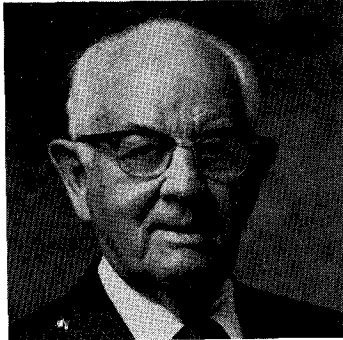
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布 5-10-30  
印刷所 株式会社 精興社  
配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀 4-9-19  
定 価 年間予約1,700円 1部150円  
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0642JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター

# 救い主を生活の中心とする



大管長  
スベンサー・W・キンボール

**若**い兄弟姉妹の皆さん、私はこの7月が来ると、全世界の人々に対するイエス・キリストの特別な証人として召されて36年になります。私は今なおこの重い特別な召しにあずかっています。主の教会の大管長会の任務にある今でもそれは変わりありません。イエス・キリストの特別な証人という責任には終わりがありません。そこできょう私は皆さんに、救い主イエス・キリストを私たちの生活の中心とすることについてお話したいと思います。

ペテロは信者たちに、滅びに至らせる異端が現われるであろうと警告しています。(Ⅱペテロ2:1) それから、最もはなはだしい異端を具体的に強調するためであるかのように、私たちが贖って下さった主を否定する異端さえも起こるであろうと述べています。主なるイエス・キリストの贖いの神性を否定すること、それは申すまでもなく、キリスト教に対する決定的な異端です。私たち一人一人が、

贖罪という偉大なみ業によって私たちを贖い、買い取って下さった御父の生みたもう独り子が事実イエス・キリストであることを受け入れない限り、どんなに立派な行ないをしても、そこに真実純粋なキリスト教は存在し得ないのです。

ヘンリー・サックマンは、「歴史の中心はベツレヘムの馬小屋にある」と語っています。キリストを真理の偉大な指導者としながら、その実在を告げる人々の教えを信じようとしするのは、まったく矛盾することです。もしキリストが御自身の正体を偽っておられたとしたら、どうして偉大な徳高い指導者となり得たでしょうか。また、私たちに復活を約束しながら、ゲッセマネとカルバリにおいて成し遂げられた贖罪が不死不滅を可能にするものでなかったとしたら、どうしてイエスは偉大な徳高い指導者となり得たでしょうか。

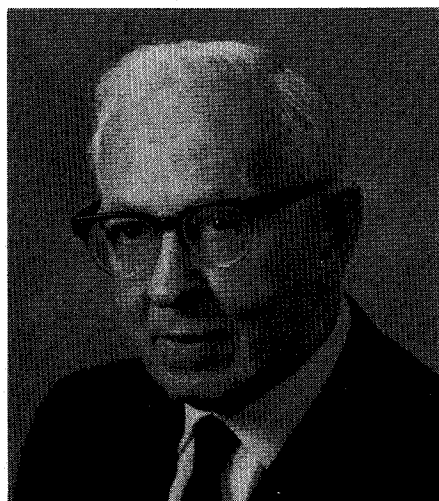
若人の皆さん、皆さんは、ペテロが先見したように、異端が激しさを増し加えている今の



時代に生きるように召されたのです。イエスが単なるひとりの道徳上の指導者であると誤った選択をする人々がますます増えています。実際イエスは最も偉大な道徳の指導者でもあったのですが、それでも単なる道徳上の指導者に過ぎないと考えることは、イエスをこの人生で役立つ指針や示唆を与えて下さった方としかみなしていないことになります。イエスが教えて下さったことは、自分が一体何者であり、また私たちの人生や個人の責任は何かということも含めて、すべてが真実です。

ペテロはこう述べています。「もしわたしたちが、この世の生活でキリストにあって単なる望みをいただいているだけだとすれば、わたしたちは、すべての人の中で最もあわれむべき存在となる。」(Ⅰコリント15:19) 今日の世界の中に絶望感や疎外感が広がっている理由のひとつには、現世にかかわることにだけ希望を抱いている人がいるということをおげられるでしょう。イエスはその働きを通して、私たちにすべてのものを与えて下さいました。つまり、贖罪によって生命を与えて下さったばかりでなく、現世を幸福に過ごすために欠くことのできない真理と標準と戒めを授けて下さったのです。イエスは最終的に、私たち一人一人の責任を明確になさる御方です。イエス・キリストの使命を、またイエス・キリストが前世において卓越した存在であられたことを理解しさえするならば、私たちは、全人類のために全人類に代わってなされた救い主のみ業を幾らかでも感じ取ることができるでしょう。

旧約時代の予言者たちは、イエス・キリストについて明確な知識を持っていました。もしこのことについてこれまで疑問に思ったことがあれば、パウロのヘブル人へ告げた言葉を読んで下さい。モーセは、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考え、パロの宮廷での安楽な生活を捨てています。(ヘブル11:26参照) またヤコブは、神の予言者たちはすべて、もちろん旧約時代の予



私たちの中には忠実に、先祖の足跡から離れている人がいるかも知れない。しかし、末日聖徒に関する限り、大多数の人々は先祖の信仰に心を背けることはしないであろう。

ジョセフ・フィールディング・  
スミス大管長

言者も含めて、キリストを信じ、キリストのみ名によって御父を礼拝していたと断言しています。「私たちがこのいくつかの言葉をこの版にのせるのは、私たちがもうすでにキリストのことを知っていることと、またキリストが降臨したもう何百年も前に私たちばかりでなく私たちよりも先に出了すべての聖い予言者たちもまた、すでにキリストの栄光を待ち望んでいたことを兄弟たちと子孫たちに知らせるためである。

ごらん、この聖い予言者たちはキリストを信じ、その御名によって御父を礼拝した。」  
(ヤコブ4:4-5)

ゲッセマネでの事の経過をまったく知らないで、カルバリでの出来事を理解することはできません。同様に、ベツレヘムでの誕生と空の墓が意味するもの、すなわちイエス・キリストの復活とは、切り離して考えることはできません。主なるキリストの使命もまた、エルサレムの囲いにいない他の羊である西半球で主がなされたみ業を理解しない限り、完全に理解することはできないでしょう。(ヨハネ10:16; IIIニーフアイ15:17, 21—24参照) 私たちはイエス・キリストの教えとみ業に対する理解を深めれば深めるほど、少なくともキリストを復活した神の御子として敬わないことがどんなに不合理なことかわかるはずです。

イエス・キリストの御自身についてのメッセージは、人類にとって何よりも重要で基本的なものです。そのためにメッセージは、過去においてきわめて平明に保たれてきましたし、今後もそうでなければなりません。同じように、救い主、ナザレのイエスの弟子である私たちすべての者が、行ないと言葉によって自らが真の信者であることを証明できるような生活をすることも必要です。

パウロは、テトスへの手紙の中で、次のように説いています。「あなた自身を良いわざの模範として示し、人を教える場合には、清廉と謹厳とをもってし、非難のない健全な言葉を言いなさい。そうすれば、反対者も、わたしたちについてなんの悪口も言えなくなり、自ら恥じいるであろう。」(テトス2:7—8)

若い皆さんが善い行ないの模範を示し、とがめを受けるような原因をつくらないことは、とても大切なことです。とは言っても、主なる救い主に従う多くの人々が、誤解や虚偽の証言によって苦しみを味わっていることも事実です。またこれからもそのようなことはあるでしょう。

はじめに私は、私が十二使徒に召されてから36年になろうとしていることについてお話しました。十二使徒に召された当時、私が特

別の尊敬と愛を抱いていた教会幹部のひとり、ステイーブン・L・リチャーズ副管長がいました。36年を経た今でもその気持ちに変わりはありません。リチャーズ副管長は数多くの重要な事柄をお話しになっていますが、その中のひとつに、救い主の真の弟子とはどういうことかについて述べた話があります。リチャーズ副管長はこのように語っています。「兄弟姉妹の皆さん、この件に関してきわめて月並みな答え方でしかないかもしれないが、私は、私たちの生活において最も自己の能力を試され、感動的でしかも重要なことは、戒めを守ることであると確信している。戒めを守ることによって、私たちの人格のあらゆる面が吟味される。それは同時に、私たちの知性、知識、人格、知恵を表示することでもある。」

若い兄弟姉妹の皆さんにとって、「救い主の戒めを守りなさい」とただ繰り返されること、ああまたかと思うようなことがあるかも知れません。しかし、リチャーズ副管長も語っているように、戒めを守することは私たちの生活の中で最も試される、感動的で、大切なことなのです。私は皆さんに、真にキリスト教徒らしい振る舞いをすることによってのみ人の幸福と安全がもたらされることを申し上げたいと思います。

50年以上も前に、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、昔の教会員は忠実だったが、次代を担う若人たちは次第に教会の標準から離れつつあると一部の人が指摘するのを耳にし、1925年に次のように語っています。「私は皆さんに、そのような見方は正しくないことを証申し上げる。もちろん私たちの中には忠実でなく、先祖の足跡から離れている人がいるかも知れない。しかし、末日聖徒に関する限り、大多数の人々は先祖の信仰に心を背けることはしないであろう。」

私も、教会の若人たちに対してスミス大管長と同じ確信を抱いています。ある人々は誘惑に屈し、勇気をくじかれていますが、大多

数の若人たちは、この誘惑の多い多難な時代にあってさえ、先祖の信仰から離れることはない、私は確信しています。そこで、これから皆さんに私の心からの助言を簡単に申し上げましょう。

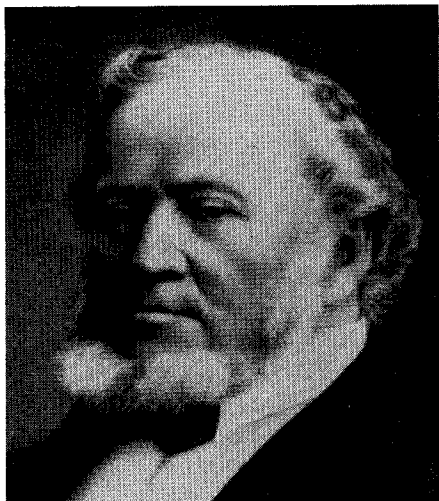
現代はまさに戦争と革命の渦巻く時代です。しかしそれでも、ブリガム・ヤング大管長の言葉にあるように、世界は将来、福音の伝道と神権の権能によって大きく変わるでしょう。私たちはその業を進めるために召されているのです。男女を問わず、私たちが皆主の戒めを守ることは、たとえそれが目に留まるような華々しいものでないとしても、世の中における最も画期的な進歩です。ありとあらゆる事変が渦巻く時代の流れの中にあって、時々、自分が取るに足りない小さな存在であるように思うことがあっても、落胆してはなりません。フィリップス・ブルックス（米国の監督教会の監督、1835—1893）は、「偉大さというのは、生活がどれほど裕福かということではなくどのような生活を送っているかに表われる」と述べています。貧しい生活を送っている人であっても、偉大さをその人に見つけることができます。皆さん方一人一人の生活はどこまでも大切だということを忘れないで下さい。自分の生活を通して周囲に影響を及ぼす範囲がたとえどんなに小さく思われても、皆さんは自分の生活の質を偉大にすることができます。そうした質の高い生活をしている限り、親切や奉仕の業を行なう機会、皆さんが思っているよりもはるかに多くあるでしょう。私は皆さんにそのことを約束します。私たちのまわりには、常に、今私たちがしている以上に行なわなければならない仕事があります。この準備の時にあって、キリスト教徒の生活にふさわしい真理や知識、技術を集めるために、皆さんが最善を尽くすことが大切です。これまでに知識として身につけてきたことを生かして下さい。フィリップス・ブルックスは、「世界が彫像で埋め尽くされる以前から、山々には大理石があふれている」

（*Literature and Life* 「文学と人生」）と語っています。これはつまり、主が皆さんの心に主御自身の像を刻めるように、基となる良い特性を皆さんの中に積んでおかなければならないということです。そこで、皆さんの持っている才能を生かしていただきたいと思います。また、自分のまわりにある奉仕の機会を利用して下さい。この勉学の機会を生かし、小麦ともみがらをふるい分けるように、すべてのことを選んで用いるようにして下さい。皆さんがより多くの人類家族のために効果的な働きができるように自分自身を備えたいと思うのであれば、まず人間の世界の小さな単位である皆さん自身の家族の中で役に立つ働きができるようになる必要があります。教会の指導者が家族制度の重要性を説き続ける一方で、その反対の考えを持つ人々が大勢いても驚くには及びません。

すべてのことが今すぐ理解できず、信仰によって受け入れなければならないことがあったとしても驚くことはありません。不明瞭なことが明らかとなり、今は困難なことが楽しみとなる日を待ち望むことができるからです。皆さんの生活や信じていることをすべて間違っていると馬鹿にする人が時々いたとしても、頭を悩ます必要はありません。彼らは口先ではあざけっても、心の奥底では、皆さんの信じていることがまったく正しいことに恐れを抱いているのです。皆さんの年代の若人たちはパウロのこの言葉の大切さを信じ、理解する必要のある人はいないでしょう。パウロは、このように勧告しています。「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。

迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。」（Ⅱコリント 4：8—9）

また、私たちは自分だけでは決して完全になれないことも覚えておいて下さい。なぜなら、パウロが同じコリントの聖徒たちへの手紙の中で述べているように、「わたしたちのこうした力は、神からきている」（Ⅱコリント



世界は将来、福音の伝道と神権の  
権能によって大きく変わるであろう。  
ブリガム・ヤング大管長

思います。

時満ちたる神権時代に住んでいる皆さんは、諸々の奇跡を目にし、また数多くの試練を受けるでしょう。今日、私たちは予言者、聖見者、啓示を受ける者として皆さんの支持をいただいておりますが、昨年の春、私たちは、「異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあって、わたしたちと共に神の国をつぐ者となり、……共に約束にあずかる者となる」(エペソ3:6)という啓示が現実のものとなった時に、初期の教会幹部の兄弟たちが感じたと同じ気持ちを改めて強く感じました。それは、パウロが言っているように、「いまは、御霊によって彼の聖なる使徒たちと預言者たちとに啓示されているが、前の時代には、人の子らに對して、そのように知らされてはいなかった」(エペソ3:5)ことです。

実に光栄ある経験でした。主ははっきりと、すべてのふさわしい男女は、住んでいる場所を問わず、完全な福音の祝福を継ぐ者となり、共にその祝福にあずかる者となることのできる時が来たことを示して下さいなのです。救い主の特別な証人として、私は皆さんに、このことを知っていただきたいと思います。私はこれまで神殿の上階の部屋を数え切れないほど訪れましたが、訪れる度に、救い主と天父を本当に身近に感じてきました。これからもそのような経験を続けていきたいと思います。主は実に明確に、私のなすべきことを示して下さいました。世の人々にそうした事柄を理解するように望むのは無理です。なぜなら、彼らはすぐに、啓示が下される神聖な過程を割り引いて受け取ったり、何かと理由をつけたりするのが常だからです。

さて、兄弟姉妹の皆さん、最後に、冒頭でも述べたように、救い主の特別な証人としての務めを果たして終わりたいと思います。私の救い主に対する証は、主は実に生きたもうということです。これは私の一貫して変わらぬ証です。このことをイエス・キリストのみ名によって心から証いたします。アーメン。

3:5)からです。

皆さん方の多くは将来、前にもお話したように、モーセと同じような選択を求められる立場に立つでしょう。パウロの言葉を読んでみましょう。「モーセは、……パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、……」(ヘブル11:24-25)

パウロが、救い主に従う人々に対して、「善にさとく、悪には、うとくあってほしい」(ローマ16:19)と説いていることは、皆さんにも容易に理解できるでしょう。罪の罠に陥らないようにするには、私たちが罪に対してあやふやな態度をとらず、断固とした態度をとるようにすれば容易にできることがわかると

「ハックス君、  
あなたはイエス・キリストを  
信じていますか」

七十人第一定員会会長  
マリオン・D・ハックス

**私** がこれからお話するクリスマスの話は、  
ずっと昔ある夏の盛りに海軍訓練センタ  
ーで起ったことです。

部屋の向い側に座っている人の制服には、  
たくさんのもので章が付いていて、それはとり  
も直さず、彼が長い間、数々の功績をたてて  
きたことを物語っています。私の方はまだ基  
礎訓練を受けている一介の見習い水夫でした。  
それにもかかわらず、ハミルトン海軍中佐は  
私をドアのところまで丁寧に迎えてしてくれ  
ました。そして私に「ハックス君」と親しみの  
ある言葉で呼びかけ、やさしく椅子に腰かけ  
るように言われました。私たちは上下の関係を  
忘れて、対等に親しく語り合うことができました。

ハミルトン中佐は、この大きな訓練センタ  
ーの従軍牧師長をしていましたが、私が従軍  
牧師になる可能性があるかどうかについて話  
し合うために私を呼んだのでした。私は、伝  
道に行くために大学を休学し、まだ学位を修  
めていないので、海軍で定められた従軍牧師  
になる資格はない、と手短かに話をしました。  
すると中佐は、他の条件さえ満足すれば、その  
ことは免除するよう力添えできると答えまし  
た。

ハミルトン中佐は、背が高く見るからに頑  
強そうな人で、私はすぐに彼を尊敬し、敬愛  
する気持ちになりました。中佐は、戦争中、  
航空母艦ヨークタウンが撃沈された時の生存  
者のひとり、救出されるまで何時間も海中  
に閉じ込められていたそうです。そのような  
人が、基地にいる末日聖徒の集会を訪れ、私  
を推薦しようと考えて下さっていることだけ  
でも有り難く思い、かえって謙遜になりました。

「ハックス君、従軍牧師として推薦する前

に尋ねたいことがあります。あなたの教会で  
経験したことを少し話して下さい。従軍牧師  
として主を代表するにふさわしい人であると  
推薦する上で、参考になると思う事柄につい  
て話して下さい。」

私はこれまでずっと教会の若い男性と一緒  
に経験してきたこと、そしてそれが私の成長  
にどれだけ役立ってきたかについて話し始  
めました。若い頃、初めて教会の活動に参加  
したことや2分半の話、執事、教師、祭司、  
長老、七十人として奉仕したこと、スカウト  
活動、セミナー、インスティテュート、日  
曜学校の教師、指導者として働いたこと、そ  
して伝道などについて話をしました。

私が話していると、中佐は最初のうちは礼  
義正しく親切に、そして興味深く私の話に耳  
を傾けてくれていたのですが、次第にいらい  
らした態度をとり始め、興味を失っていった  
のです。これは特に、一対一で話をする時に  
陥りがちな弊害ですが、私自身中佐の心の思  
いを察せずに一方的にしゃべりまくっていた  
のでした。私は少し不安になってきました。  
そこで、私は一生懸命に、教会では若人が神  
の僕となれるようにその特質を伸ばす機会が  
折に触れて与えられるようになっていきますと  
説明しました。

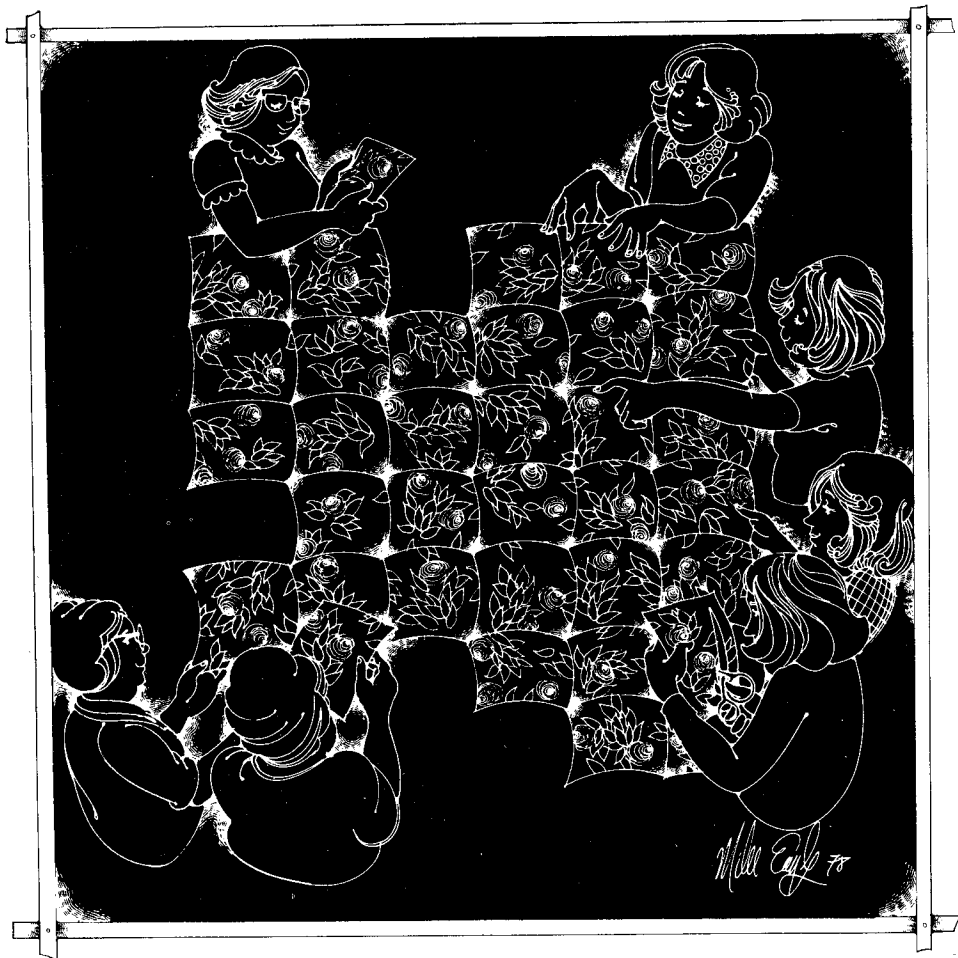
しばらくして中佐の態度が一変したかと思  
うと、突然彼は私の話を中断して不愛想にこ  
う言ったのです。「ところでハックス君、あな  
たはイエス・キリストを信じていますか。」

「はい、閣下。もちろんです。私が信じて  
いることはすべてイエス・キリストに結び付  
いています。私の信仰、生活はすべてイエス・  
キリストが私たちの救い主であることが中心  
となっています。私の所属している教会は、  
このキリストの上に建てられた教会であり、  
生けるキリストを頭としている教会です。そし  
て、実際にキリストの名前で呼ばれています。」

中佐は時計を見ながら言いました。「そうで  
すか。あなたはこれまで7分間も話しましたが、  
一言もそれについて言いませんでした。」

私はその時、二度と同じ失敗を繰り返すま  
いと、そう心に誓ったのです。





## 失くして得た宝物

キム・R・バーニンガム

クリスマスまであと1カ月、妻の両親に贈る最高の贈り物もこれまで、何週間も居間を占有してきたが、そろそろ完成である。

スーザンの父親は背中が悪く、そのためにキングサイズより大きいベッドを特別にあつらえ、半分を父親用に硬く、半分を母親用に

柔らかくしていた。寝室をすっかり占領するほどの大きなベッドにはひとつの問題があった。母親のエレインは、そのことでよくぐちをこぼしていた。「家にあるベッドカバーじゃ、どれも小さすぎるの。いつも長さが足りないか、片側にずり落ちるかしているの見苦し

いったら、ありゃしない。あのベッドに合う大きさはないものかしらねえ。」

そこでこの10月、スーザンはそれに合うような大きなベッドカバーを作ろうと決心したのだった。

彼女が何度も町に足を運んで、ようやくみつけたのは、寝室にぴったりくる温かいピンク色をした、楽しい花柄のプリント地だった。ワード部の友達が大きなキルティグ用の枠を喜んで貸してくれた。枠を組み立て、画鋸で留めると、居間はほとんどいっぱいになった。そこでピアノを廊下に出し、家具を空いている場所に全部移動した。ホームティーチャーが来た時には、台所で話をしたほどである。

こうしてスーザンは自分の余暇をすべてベッドカバー作りに注いだのだった。初めてのことであったし、夜は遅くまでキルティグに没頭することもしばしばであった。ようやくベッドのそばに来て、ふたりで手を組んで祈ろうとすると、スーザンの指先が針を突いたあとですりむけているのである。ともかく、ゆっくりではあるがふたつの枠が近づいているのを見るたびに、仕事ははかどっていることがわかった。

このベッドカバーのことを隠しておくのがまたひと苦勞である。枠を組んでいる時にはスーザンの面親は私たちの家に立入り禁止にしていた。それでも時々困ったことが起きる。ある寒い日、母のエレインがちょっとした使いで家へやってきた。スーザンは不在で、私が玄関に出た。彼女はどうしても家に入れようとしないうちはさぞかし奇妙な息子と思ったに違いない。私が玄関で品物を受け取り、いちいち中に運んでいき、しかもそのたびにドアを閉めるものだから、義母はとうとう合点がゆかない様子で帰って行ってしまった。

枠組をはずした夜、スーザンは仕事を成し遂げた誇りと感激で涙を押さえることができなかった。「早く母の喜ぶ顔が見たいわ」と叫んでいた。

しかしその夜の喜びは、クリスマスを前にして一瞬に悲しみの涙と化してしまったのである。

翌朝、私が学校に出かけた後スーザンはほとんど出来上ったベッドカバーを汚さないようにビニール袋に入れて、改造中の部屋に隠すことにした。部屋の戸棚はまだ作りかけで、その日も大工さんが仕事にやってきた。ところが彼はその大きなビニールの包みを邪魔になると思って、ガレージに移してしまったのである。

私が悪かったのだと思う。その晩はちょうどゴミを出す日だったので、私はゴミバケツを外に出し、各部屋の紙くずを移して、そして最後にビニール袋のゴミをあけた。

次の日、私が帰宅するとスーザンは赤く泣きはらしたような目で私を迎えた。そして戸棚のまわりを片付けものをしながら私を見上げて、「きょう、大変なことが起こったの」と低い声でつぶやいた。

みるみるうちに涙が頬を伝って流れ出した。私は泣き続けるスーザンを両腕にしっかり抱いた。しばらくして彼女は口を開いて言った。「あのベッドカバーをゴミに出したらいいの。」

あのベッドカバーがゴミに！スーザンは涙ながらに、ちょうど昼頃、カバーが失くしていることに気づいたと話してくれた。私が研修で出ている連絡がつかないので、母親を呼び、ベッドカバーのことやそれを作るために何週間もかけたこと、そしてそれをゴミに出してしまったことなどについて話したらしい。それから妻は母親と2歳の息子まで動員して、ゴミ捨て場へ行き、ベッドカバーを捜

したのである。

3人はゴミの山をひとつずつかきわけ、歩きまわった。すでに大きな機械で土をかぶせているゴミ山もあった。ビニール袋はたくさんあったが、ピンク色の、しかも花柄のベッドカバーが入った袋はどこにもなかった。

「ゴミを持って行かれたのはいつでしたか」と、係員が聞いてきた。

「けさ早くでした。」

「それじゃ、おそらくもう土の下になっていると思いますよ。申しわけありませんが、私たちもそうそうためて置くこともできませんので。」

「そうですか。どうもありがとうございます。」

私には妻を慰める言葉がなかった。これほどのクリスマスプレゼントはないと思っていたものが今はゴミの山の中である。あと2、3日もすれば、大声をあげて喜び合うこともできたのに。

しかし今からやり直す時間もない。とてもひとりではできないことではない。

ところがこの話はまたたく間に近所に知れわたった。そして人々の口を伝わって教会員の耳にも入ったのであろう。すぐに扶助協会の会長が家を訪ねて下さった。

「みんなでお手伝いしようということになりました。ご遠慮は無用ですわ。生地をご用意して下さい、私たちが交替でお助けします。」

スーザンは同じピンクの生地を捜したが、見つからなかった。その代りに、キルティングにうってつけの格子柄に小さい赤いいちごが散らしている白いプリント地を見つけてきた。私たちが枠を組み立てると、女性たちが手伝いにやってきた。それも大挙してである。

朝、私が学校へ出かける時にはもう人が来

て、針を動かしていた。学校から帰ると、4交替がすでに終わっていた。ベッドカバーはみるみるうちに出来上がっていった。

なかにはスーザンが驚くような速さで縫う人もいれば、遅い人もいた。しかしどの人も丁寧に仕事をした。休みの合間に家に飛んで帰って食事の仕度をして、また戻って一日中手伝ってくれる人々もいた。にぎやかに語りあい、笑いながら仕事をした。私たちはこのワード部に来てまだ日も浅かったが、この作業を通して馴染みの薄かった人と知り合いになり、親しく語ることができるようになった。

ほんの数日のうちに、彼女たちは来た時と同じようにして帰って行った。まるで軍隊が進軍し、勝利を収めて帰還したようである。こうしてスーザンは2枚目の美しいベッドカバーを手にしたのだった。かすかに残る血の跡が、我家を吹き抜けて行ったあの善意の力を物語っていた。

スーザンの両親にはまさしくびっくりするプレゼントであった。彼らは最初のベッドカバーがどうなったかよく知っており、残された数日のうちにベッドカバーをもう一枚作ることが不可能であることも十分承知していた。私たちははやる心でキルティングしたベッドカバーを小さい箱に詰め込み、きれいに包装した。両親にも想像がつくはずがない。

案の定、義母のエレインはクリスマスの朝に箱を開いて、白地にいちごが散らしたベッドカバーを見た時、思わず泣き出した。スーザンも泣いた。そしてその場にいた者全員が泣いたのである。

あの忘れることのできないクリスマスの日からすでに6年が過ぎた。そして今でもあのベッドカバーはこれまで私たちがあげた、いや貰った中で最高のクリスマスプレゼントだったと思っている。

# 対応する新旧両世界

**布**地のプリント技術、立像、ピラミッド、車輪付きおもちゃ、義歯などは、新旧両世界に存在し、とても何の相関関係もないとは考えられない「驚くべき類似性」を持つ幾つかの例である。ボストン、ペントリーカレッジのノーマン・トットン博士は最近ブリガム・ヤング大学で非常に興味ある発表をした。彼の講演は末日聖徒に特別の関心を生み、コロンブス以前に旧世界から新世界へ、航海がなされていたことの裏付けとなるものであった。

彼の説明によると、クレタ島とテキサス州で発見された船の絵はほとんど同じ型をしていて、しかもコロンブスがアメリカを発見した時のヨーロッパ型の船とはまるで違っているのである。また、双方の海でスクリューの原理が応用されていた。女人像には、かつてパナマのサン Blas 島やネパールで発見された頭巾や鼻輪、硬貨の首飾りと非常によく似たのが見られると言う。さらにニュー・メキシコ州アルブケルクの南方にある「ロス・ルナス」の銘文は、ヘブライ語ともフェニキア語とも読み取れる。

トットン博士は、例えば、リビアのバーバル語と北米ズーニー族との間には50パーセントの相関性があるといった、アメリカインディアンの言語に見られる地中海民族の言語的影響を指摘したバリー・フェル博士の研究も紹介した。またカルタゴとイベリアの文字がバーモント州の石に刻まれていたり、同じバーモント州ではアイルランドのオガム文字が発見されている。またトットン博士は中国と

エジプトの古書に独得の基盤様式を発見したが、それはポルトガルと合衆国のアーカンソー州にもあり、どれも同じく「農地」を意味していると言う。

通貨の歴史を調べてみても、コロンブスの航海以前に海を渡った人々がいたことがわかるらしい。女神アテナの顔や怪物スキュラに至るまで細かく刻まれたギリシャの硬貨が、アーカンソー州の2カ所で発見された。紀元65年と推定される第一次ユダヤ戦争の銀貨がテネシー州で、また紀元135年頃の第二次ユダヤ戦争の銀貨がケンタッキー州の4カ所で発見されている。

古代に大洋航海が行なわれていたというこれほど多くの証拠がありながら、それでもなぜアメリカの歴史はコロンブスから始まると教えられているのだろうか。トットン博士は、ジュリアス・シーザーの軍隊がアレクサンドリアやカルタゴなどにある大図書館を焼打ちした時、航海や文化に関する資料もほとんど焼失したのだと述べている。当時フェニキア人や他の船乗りたちは、経済の利権を確保するために貿易風や海流について公表しなかったのである。トットン博士はこう述べている。「コロンブスがどれだけのことを知っていたか、私たちに知るすべもありませんが、当時の教養ある人の大半が、地球が丸いということを知っていたというのはかなり確かなこととされています。そのほかにもたくさんを知っていたと思いますが、まだ私たちに明らかになっていません。」

# 会員伝道を行なうには

エンサイン編集副主幹  
マービン・K・ガードナー

**子** 供はまだ小さいし、定年まで30年以上もあるけれど、あなたは伝道に出たいと思ったことはないだろうか。

また、専任宣教師として働いた経験がないことから、伝道活動に負い目を感じたことはないだろうか。

あるいは、だれかに福音について話すことなど思いもよらないことであり、伝道について考えるだけでも怖い（あるいは、飽き飽きしている）と感じていることはないだろうか。

そんな人は、まず次の質問に答えてみていただきたい。今まで考えつかなかったようなアイディアが得られるかもしれない。また、思ったよりずっと上手に伝道している自分を改めて発見することができるかもしれない。

1. 私たちは新しく近所に引っ越してきた人を歓迎しているだろうか。そして、教会に関心の有る無しを問わず、友人となって親しく交わっているだろうか。
2. 隣人が私たちの家、服装、部屋、車などを見た時、清潔さや整理整頓、美しさの高い標準を保っていると感じるだろうか。
3. 私たちは近所の人々と互いに助け合うほど親しくなっているだろうか。

4. 家族や教会の活動に、教会外の隣人を招いているだろうか。
5. うわさ話や下品な話、不作法な言葉遣いを慎んでいるだろうか。
6. 隣人のために何か特別なよいことをしているだろうか。
7. 喫煙や飲酒をする人に対して、さげすむような態度をとることはないだろうか。
8. コーヒーを勧められた時に、丁寧に断わる方法を心得ているだろうか。
9. 教会員でない友人や親戚に手紙を出しているだろうか。
10. モルモン経や「聖徒の道」を教会外の友人に送っているだろうか。
11. 伝道のために貯金をしているだろうか。子供たちは伝道資金を貯める自分の口座を持っているだろうか。
12. 定期的に聖典を勉強しているだろうか。
13. 福音を受け入れていない国々や人々のために祈っているだろうか。
14. 正直に仕事をしているだろうか。
15. 教会の宣教師基金に献金しているだろうか。
16. 人種や文化に対する偏見があれば、それを克服するよう努力しているだろうか。



ら常に伝道のことを心に留めるようにすることである。すなわち熱心に働き、祈り、学び、貯金し、健康を保ち、人に伝え愛することを学ぶということである。そして、子供たちにも同じことをするように教えるのである。

#### 4. 送る……伝道資金を援助したり、モルモン経や『聖徒の道』を贈ったりして伝道を支援する。

宣教師基金に献金する、モルモン経を贈る、「聖徒の道」をプレゼントする、そのよ

うにすれば、家にいながら活発に伝道活動に参加することができる。

#### 5. 奉仕……非教会員である友人や家族をフレンドショッピングし、会員宣教師として奉仕する。

最初の4つの義務は、日常生活にほとんど支障をきたすことはない。この5番目の義務を果たすには少し余計に努力を必要とするが、それだけの価値はある。一緒に楽しく過ごして親しくなった人々の中から、祈りによってある人を選び出し、教会についてさらに詳しく学ぶために招待するのである。

## 友情から兄弟愛を

ある日、まだ教会員でない家族がアイダホ州ボイシンのハワード家の近くに引っ越してきた。ハワード家のコレットとチャックは早速、このウィルソン家を訪問することにした。実は、コレット自身近くに親しい友人がほしいと思っていたところだったからである。

ふたりはすぐに友達になることができた。ウィルソン家のパムも友達が欲しいと思っていたところで、コレットと知り合えたことを心から喜んだ。

話題が宗教の話になった時、たまたまウィルソン家族は全員でパムの両親の家を訪問する計画を立てていた。そこでコレットは実家にいる間に家族の歴史を集めるように勤めてみた。パムも快くそれに応じてみることにしたのだった。それがきっかけとなって、パムはコレットと一緒に、二度教会に行ってみた。パムはそれっきりで教会には行かなくなったが、それでもふたりはよい友達として親しく交わっていた。

そんなある日、パムの父親が癌にかかり、パムは死後の世界について真剣に考えるようになった。そんなパムの思いを察したコ

レットは、すぐに彼女に電話をした。ふたりは、死とか、人間の霊が不滅であることについて話し合った。パムの心の中に次第に証が芽生えてきた。

その後何度か日曜学校に集ってから、パムは言った。「ねえ、私、とても大切なものを得たような気がするの。」

「心の安らぎみたいなものじゃない？」

「ええ、そうなの。」パムはうなずいた。「今だったら、死を素直に受け入れることができそうだね。」

こうしてパムは1979年2月にバプテスマを受けた。これは、よい友達を得たい、また自分も良い友達になりたいと心から願っている人がいたからである。

もし私たちが隣人や知人と友達になって友情を深めることができるならば、福音を分かち合うことももっと自然にできるはずである。たとえ彼らが福音を受け入れてくれなかったとしても、友情によってふたりはいつまでも親しく交わることができる。もし福音を受け入れてバプテスマを受けるならば、友情よりもさらに強い福音に基づく兄弟愛の絆を育てることができるであろう。

月 曜日の夜、ジム・バートンは家族と一緒に家庭の夕べを開いていた。歌を歌い、祈り、いつものように父親がレッスンをした。

長老定員会の教師をしているジムは、自分のことを結構良い教師だと自負していた。し

かし、レッスンが始まるとすぐに15歳のジム・ジュニアが額に手をあてて、下を向いてしまった。同じ十代のジェニーは、父親が聖句をもうひとつ読み始めると、明らかに落ち着かない様子であった。小さい子供たちは子供た

## 子供を信頼する



ちで、「静かに座っていなさい。そうしないとベッドに連れて行くからね」と何度も叱られている。

こうしてどうにかレッスンが終わると、子供たちはいっせいに自分のことを始める。残るのはため息ばかりであった。

「子供たちはみんなどうしたというんだ。さっぱりぼくの話聴こうとしないじゃないか」とジムが言う。

「そうかもしれないけど……本当はあなたの話し方に問題があるんじゃないかしら」と奥さんが答える。

「それはどういう意味だい。ぼくの教え方が悪いとでもいうのかい。」

「そうじゃないのよ。子供たちはただ講義がいやなの。特に、ジムやジェニーの年齢の子はね。」

「じゃ、どうすればいいんだい。」

「そうね、来週は何もしないっていうのはどう。」

「何だって、家庭の夕べをしないっていうのかい。」

「そうじゃないわ。つまり、あなたは何もしないで、子供たちにやらせるのよ。子供たちに参加させるの。」

「そんなことしたら、どんな家庭の夕べになると思う。まるでパーティーだ。」

「多分、初めの1,2回はそうでしょうけど、そのうち飽きてくるわ。ねえ、一度そうしてみましようよ。」

ジムはそのことでなかなか決心がつかなかったが、それでも最後には子供たちにさせてみることになった。こうして次の週の月曜日は、バートン家の家庭の夕べの転機となったのである。ジェニーがまとめ役となってそれ

ぞれの子供に何かをするように割り当て、ジム・ジュニアが家族全員とするゲームを考えてた。

父親はその夜、とても楽しい一時を過ごした。そして、妻から後でジム・ジュニアのことを聞かされた時には、家族全員が参加して家庭の夕べをすることがどんなに大切なのか改めて知ったのである。ジム・ジュニアはこう言っていた。「ねえ、母さん、父さんがぼくらを信頼しているって初めて感じたよ。」

家族全員が参加して家庭の夕べを開くと、どのような素晴らしいことが起こるだろうか。

各自が自分のアイディアや能力を生かすことができる。そのために、活動の範囲が広がり深みが増す。

みんなが何かを行ないながら学ぶことができる。ケーキの作り方をただ聞いただけでは、実際に粉を上手に混ぜることはできないからである。

いろいろな責任を与えられると、子供の方にも自信がつく。讃美歌の指揮、祈り、話、司会、聖句朗読、特別な報告、リフレッシュメントの準備など、各自の能力に合った責任を与えるように注意することが必要である。割り当てが順番になるように、ちょっとした工夫をしてみるとよい。

家庭の夕べを良くするために、自分もその一翼を担っていると感じるようになれば、活動に寄せる関心も高くなるはずである。家庭の夕べは、家族のみんなが参加することによって得られる祝福を享受しない限り、本当の家庭の夕べとは言えないのである。



G. D. 185

# 愛をもって人を責める

スペンサー・J・コンディー

**初** 等協会で教える時、子供をしつける時、夫や妻と問題を論じ合う時など、私たちはだれでも一度は抑えようのないいら立ちをおぼえ、腹が立った経験があると思う。「聖霊に感動しては機に臨みて激しく人を責む」(教義と聖約 121:43)を言い訳に自分の感情を正当化して、怒りにまかせて暴言を発したことがあるかもしれない。しかし、そのような感情の高まりを感じる時でも怒りからではなく、みたまの導きによって言葉を述べるようにするにはどうすればよいだろうか。

それがみたまによるものかどうかを知るのはいかなかなかむずかしいことだが、しかしあえて言うならば、もし私たちが次にあげる項目のいずれかに該当する時は大抵聖霊に感動していないのである。

1. 大声で怒鳴る。
2. ののしりなじる。
3. 人に対して憎しみやあつれきを感じる。
4. 我が子も含め、人の自尊心を打ち砕き、傷つけようとする。
5. 自分の言葉が人にどんな影響を及ぼすかということがそれほど気にならない。
6. 本人やその問題とはまったく関係のないことの不満をただ発散させているだけにすぎない。

他方、次のようであれば聖霊に感動していると言えるであろう。

1. 激しい叱責の言葉が大義に適っている。
- ジョセフ・スミスがリバティーの牢獄で牢番

を咎めた時、牢番は神聖な御二方の清いみ名を冒瀆し、卑猥なことを言ったために厳しく叱責されたのであった。救い主が聖なる神殿から両替人を追い出されたのも同じことであった。両替人たちの聖所を汚す不敬な態度が、激しいけん責を呼んだのである。しかし、初等協会の4歳の子供が泥足で教室を汚したとしても柔和に、しかも忍耐を持って接するべきである。

2. 注意を受ける側だけでなく、与える側にとっても苦しい。つまり、重荷をだれかに負わせて自分の気晴しをすることはできないのである。「説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛……また、親切と浄き知識」(教義と聖約 121:41—42)とによって叱責したのであれば、虐待や雑言は出てくるはずはないのである。

3. 悪感情をいつまでも抱くことなくその場で、叱責する。だれかを叱責するように聖霊の勧めがあったら、悪感情を抱く期間を与えることなく、即座に叱責する。そして聖霊に感動していれば、違いを調整し、以前より胸襟を開いた信頼関係を築こうと努力するはずである。

4. 人を責めた後で「一層の愛」(教義と聖約 121:43)を示す。これは偽らざる愛であり、数時間、あるいは数日間冷たくした後で愛を示すのではなく、叱責のすぐ後に示すのでなければならない。また、叱責が以後の関係に障壁とならないように、愛を示してゆく必要がある。

5. 自分の言葉や感情を細かく観察してみ



る。事実をよく知ることによって、「偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だたいならしむる」(教義と聖約121:42) 淨い知識をもって話すことができる。相手を傷つけることを避け、事実を曲解し、問題を過大視することもない。目的は、人を助け、当面の問題について話し合うことである。相手に屈辱感を与えてはならない。

6. 叱責する前に、まずみたまと一致している。両親が感情むき出しで口論しているが、子供に家の中をきれいにしなさいと叱ってもおそらく聖霊の導きを受けることはできないであろう。

7. 可能な限り祈って、叱る前に心の準備をする。ある時、私はある家族から問題の調停役を頼まれたことがある。父親が妻子に暴力をふるったのである。家族と会う数時間前に、私はどう話をしようかと考えてみた。そして、この乱暴な父親の家族に対する残酷な行為を厳しく叱責するつもりでその夜に臨んだ。しかし不思議と私の口を突いて出た言葉はこうだった。「フレッド、僕は君が好きだし、奥さんもお子さんたちも好きだ。家族が永遠の幸せな家庭を築いてゆけるように力になりたいのだが。」その言葉に、フレッドは心の壁を取り払ったようであった。奥さんも罪状をあげつらうようなこともなく、ふたりは過去の不愉快なことはすべて水に流して新たな生活を踏み出そうと決心したのである。そして私が述べる具体的な助言を素直に聞き入れてくれた。

8. 叱責した後で自分の心に平安を覚える。本当に聖霊に感謝していれば、何を言うべきか、どのように言うべきか聖霊が教えてくださるはずである。話した後で、あれを言えばよかった、これを言わなければよかったと後悔する必要はないのである。

## 「汝らわが言うところを行わば」

ハリエット・S・ハルバート

**私** たちの結婚生活は、宗教のことさえ除けばとても満足のいくものでした。幼少の頃さほど恵まれなかった私は、18歳で家と教会を離れ、20歳の時に非教会員のノーマンと結婚しました。教会とは無縁の毎日ではありましたが、それでも私は聖霊が私たちの結婚生活を導き、守って下さっていると感じていました。夫のノーマンは人間としては非常に立派な人ですが、教会に対して強い偏見を持っていました。それでも私が子供をモルモンとして育てることだけは許してくれていました。私は自分から進んで教会に足を向けようとはしませんでした。しかし、霊的なものを求める気持ちは私が想像していた以上に大きなものでした。

私たち夫婦には15年間も子供がありませんでした。そこで男の赤ちゃんを養子にもらったのですが、それから2年半後に、男の子を産みました。ダグラスが3歳になった時、彼を連れて日曜学校に行きました。私が子供時代に経験したように子供を教会にただ送り出すのではなく、自分の子供だけは必ず一緒に連れて行ってあげようと思っていたからです。私は教会に参加しなくても、ふたりの息子には正しい宗教教育を受けてもらいたいとただそれだけを願っていたのです。「私は今、悪い習慣にむしばまれています。でも、ひとたび教会の責任に召されたら、教会の標準を完全に守って生活しますわ。」私がよく口にした言葉です。そうは言っても召しを受ける気など全くなかったものですから、すっかり安心していました。ところが、スティーブンが3歳になる頃、子供日曜学校の3コースの教師に召されたのです。スティーブンは私が一緒にでなければ日曜学校に行きません。私はど

うしようもなく、不承不承この責任を引き受けました。そして、知恵の言葉をはじめ、すべての戒めを守って生活するために、全力を尽くすようになりました。

次第に私は、福音こそ私が求めていたものであり、家族にとって必要なものであると考えようになりました。こうして苦しかった悔い改めの期間を経て、自分の一生を主に捧げるようになって初めて、私は強い信仰を築くことができたのです。1956年に受けた祝福師の祝福の中に、次のような約束を読み、私は大きな慰めを得ることができました。「もしあなたが信仰を持って主に忠実に生きるならば、主はあなたのすぐ前を歩まれるであろう。時至らば、あなたの心の義しき願いと日々の祈りが答えられ、万事よろしといえるように、なるよう主の使いはあなたの前に道を備えて下さるであろう。」

何という喜びでしょうか。かと言って、悲しみがすべてなくなったわけでもありません。愛する夫は何ひとつ祝福を受けていないのです。私は少し意地になって、夫に福音を押し付けようと思いました。私が見つけたこのすばらしい真理を夫にも理解し、受け入れてもらいたかったのです。それがもとで何度かいさかいが起こり、1958年にとうとう離婚の一手前にまでなりました。

この危機に際して、私は心から謙遜になり、長い時間主に祈り、天父のみ手にすべてを委ねました。そして教会に行かない夫にこれ以上無理強いをして、罪悪感を与えてはいけなしいと思いました。その代わりに夫が心からくつろげる家庭を築こうと決心しました。あらゆる面で模範を示し、愛にあふれた妻となり、夫の自由意志を尊重するようにしたのです。誠実な夫であるノーマンは、私の子供たちを教会の教えにそって育てるのを前と同じように許してくれました。これは、子供の頃から教会に対する根深い偏見を持っていた夫にしてみれば、驚くべきことです。私も息子も教会で与えられた責任はすべて引き受けました。そして、いつも喜びにあふれるほほえみと愛を持って家に帰りました。私たちは夫のために祈り、断食もしました。しかし、何よ

りもまず、夫を愛するように努めました。夫はいつも家族の頭だったからです。

私は、ノーマンの抱くどのような疑問にも答えられるように、福音に精通しておく必要があると考えました。それから14年間、私は熱心に福音を勉強しました。そして、学べば学ぶほど、福音は自分にとって欠くことのできないものになっていきました。みたまの導きを得た時には、その経験を夫にも分かち合うようにしました。何をいつ話したらよいのかははっきりとしたみたまのささやきを受けたこともしばしばありました。14年間の出来事をわずか数行で書き尽くすことはできません。これまで多くの障害や心を痛めることがありました。しかし、私も息子も福音に従った生活から決して離れようとはしませんでした。

1967年、ノーマンはある宗教奉仕団体に加わる決心をしました。そのことで改宗がますます困難になると心配した私は、猛烈に反対しました。

「そんなことをすれば、教会に対する偏見がもっと深くなるわ。」

「偏見など持っていないよ。」

「それじゃ、がまんして私と一緒に教会に行って下さるかしら。」

夫は何も答えませんでした。しかし、あとになって、「もし、君が本当に出席して欲しいのなら、教会に行こう」と言ってくれました。こうして、夫は初めて日曜学校の求道者のクラスに出席したのです。それから1年経たない内に、聖餐会にも集うようになりました。もちろん、私は息子たちと共に大喜びしました。ワード部の会員たちも夫を心から歓迎して、ワード部に早くなじめるようにして下しました。皆さんの助けに心から感謝しています。しかし、その間も夫は心の中で激しく葛藤していたようでした。教義に対してもいろいろな質問をしました。(後になって、何が改宗の鍵になったのか尋ねられた時に、夫は次のように答えました。「第1に、自分にとって家族が何よりも大切な存在であるということがわかりましたし、この教会で教えている家族中心のプログラムに強く心を打たれました。第2に、福音が誤っていることを証明しよう

としたが、それも果たすことができませんでした。だとすれば、この福音は正しに違いないと思ったのです。」もうひとつ感謝すべきことは、ワード部の皆さんが家庭で開くいろいろな社交活動に私たちを招待して下さいました。そこでノーマンは、アルコールなしで楽しい時を過ごすことができることを知りました。こうして息子たちが伝道に出る時にはその資金を援助し、出発する前の聖餐会では短い話もしました。

そんな折、1971年の秋に、ソルトレーク・シティで開かれた扶助協会の大会で十二使徒評議員会会員のボイド・K・パッカー長老がお話をなさいました。私は彼の靈感あふれる話を聞き、これまでどうしても話せなかった夫の改宗に対する私の正直な気持ちを述べる勇気を得ました。その時、パッカー長老は次のように言われました。

「私はこれまでに、妻が心から願い、どう励ましたらよいかを知っているならば、夫はいつまでも教会に逆らってられないとお話してきた。……

もし充分な信仰と望みがあるなら、あなたはいつか家族の長に教会に活発な信仰篤い夫をいただくことができるであろう。

ずっと以前に希望を失ったある人が、はきすてるように『奇跡でなくては無理ですね』と言った。私はそうですと答えた。どうして奇跡でないことがあろうか。それは奇跡以外の何であらうか。そこには、さらに価値ある目的があると言えないであらうか。……

繰り返して言うが、夫が教会に行くことを面倒臭いと感じる時、あなたは、彼に家にいながら教会にるように感じさせることを行ないなさい。……

姉妹たち、福音を夫にとっても価値あるものとなし、彼らにそれこそ自分たちの目的であることを知らせなさい。……

夫に知らせなくてはならない。あなたがどんなに福音を大切にしているかということ、福音のゆえにさらに夫を大事に思うこと、福音が自分にとって何であるかを。」(『家庭から始めなさい』『聖徒の道』1972年7月号、pp. 298—303)

主の使徒は私に、夫が福音を受け入れることが私にとってどのような意味があるか話するように教えて下さったのでした。何という祝福でしょう。家庭では、夫が話し出さない限り、福音について話し合うことはありませんでした。私は喜びの涙にむせびながら、どのようにして夫に話せばよいか考えました。その時、次の聖句が心に浮んできました。「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約 82:10) 私はもう一度断食して祈り、主に頼ることにしました。そして1972年の1月に、ようやく夫に話す勇気を得たのでした。

あの晩、私はノーマンに、今まで福音を受け入れる気になったことはないですかと尋ねました。すると、彼は穏やかですがきっぱりと「ない」と答えました。私は大きく息を吸ってから、これまでノーマンがどれほど立派な夫であり父親であったか、また、私と子供たちがどんなに愛しているか伝えました。しかし私が一番望んでいるものを与えて下さっていませんと言いました。とうとう口に出して言ってしまったのです。主の使徒の勧告に従って、話したのでした。それから6カ月後、実に結婚生活37年目にして、ノーマンはバプテスマを受けました。それはまさに奇跡でした。

今から振り返ってみると、1月に夫に話をしてから夫がバプテスマを受けるまでの数カ月間いろいろなことがありました。ソルトレーク・シティに住む友人たちが、「もはや異国人でもなく」(“No More Strangers” ハートマン・レクター、コニー・レクター共著)という本を夫に送り、神権を受けて家長としての責任を果すように勧めて下さいました。年下の息子が伝道に出る時にもノーマンは短い話をしましたが、その後でノーマンが出席している日曜学校の教師からバプテスマのチャレンジを受けました。スティーブンは手紙を書いて父親を励まし、モルモン経を読むように勧めました。ダグラスも証を述べてきました。1972年に伝道に出たスティーブンが、1974年に伝道から帰ってみると、父親は監督会の第2副監督として壇上に座っていたのです。



# ちいとも 小さなお友だちへ



## でん ルカ伝

初<sup>うい</sup>子を生み、布<sup>ぬの</sup>にくるんで、飼葉<sup>かいば</sup>おけ<sup>なか</sup>の中に寝<sup>ね</sup>かせた。客間<sup>きやくま</sup>には彼<sup>かれ</sup>らのい  
る余地<sup>よち</sup>がなかったからである。

さて、この地方<sup>ちほう</sup>で羊飼<sup>ひつじかい</sup>たちが夜<sup>よる</sup>、野宿<sup>のじゆく</sup>しながら羊<sup>ひつじ</sup>の群<sup>む</sup>れの番<sup>ばん</sup>をしていた。

すると主<sup>しゅ</sup>の御使<sup>みつかい</sup>が現<sup>あらわ</sup>れ、主<sup>しゅ</sup>の栄光<sup>えいこう</sup>が彼<sup>かれ</sup>らをめぐり照<sup>て</sup>らしたので、彼<sup>かれ</sup>らは非  
常<sup>じょう</sup>に恐<sup>おそ</sup>れた。

御使<sup>みつかい</sup>は言<sup>い</sup>った、「恐<sup>おそ</sup>れるな。見<sup>み</sup>よ、すべての民<sup>たみ</sup>に与<sup>あた</sup>えられる大<sup>おお</sup>きな喜<sup>よろこ</sup>びを、  
あな<sup>あな</sup>たがたに伝<sup>つた</sup>える。

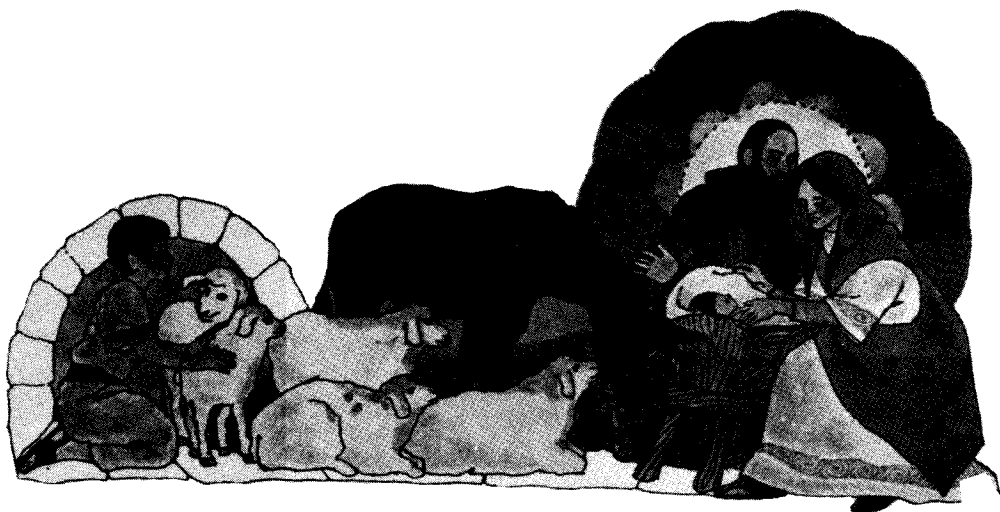
きょうダビデ<sup>まち</sup>の町<sup>まち</sup>に、あな<sup>あな</sup>たがたのため<sup>ため</sup>に救主<sup>すくいぬし</sup>が<sup>うま</sup>お生<sup>うま</sup>れになった。このか  
たこそ主<sup>しゅ</sup>なるキリストである。

あな<sup>あな</sup>たがたは、幼<sup>おさな</sup>な子<sup>こ</sup>が布<sup>ぬの</sup>にくるまって飼葉<sup>かいば</sup>おけ<sup>なか</sup>の中に寝<sup>ね</sup>かしてあるのを  
見<sup>み</sup>るであろう。それが、あな<sup>あな</sup>たがたに与<sup>あた</sup>えられるしるしである」。

するとたちまち、おびた<sup>てん</sup>だしい天<sup>てん</sup>の軍勢<sup>ぐんぜい</sup>が現<sup>あら</sup>われ、御使<sup>みつかい</sup>と一緒<sup>いっしょ</sup>になっ<sup>かみ</sup>て神<sup>かみ</sup>  
をさんびして言<sup>い</sup>った、

「いと高<sup>たか</sup>きところでは、神<sup>かみ</sup>に栄光<sup>えいこう</sup>があるように、地<sup>ち</sup>の上<sup>うへ</sup>では、み心<sup>みこころ</sup>にかな  
う人々<sup>ひとびと</sup>に平和<sup>へいわ</sup>があるように」。

ルカによる福音書 2：7—14



# なみしい

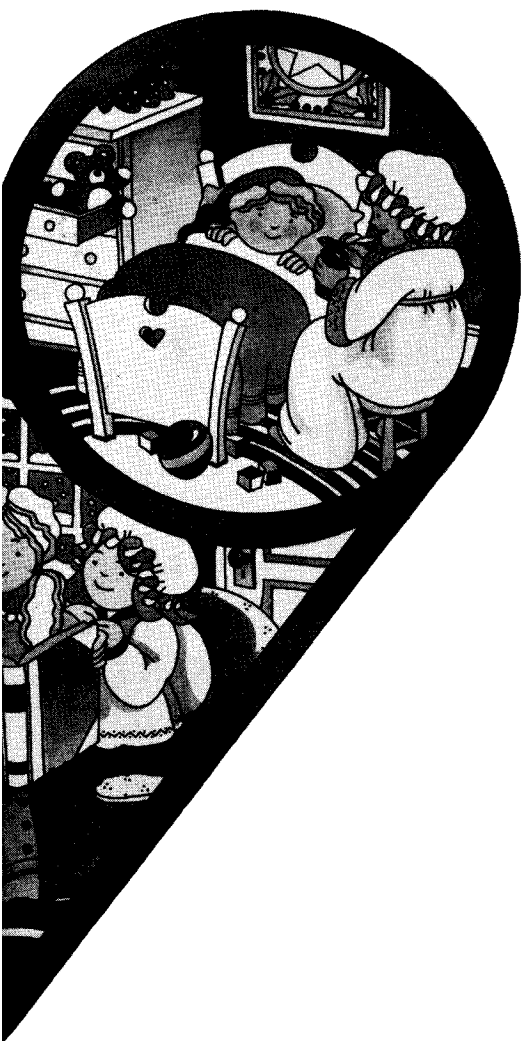
せ かい中の子どもや大人が、クリスマスのおくり物をまっています。  
両親は、子どもがプレゼントをひらきながら、うれしがったり、びっくりしたりするのを見てしあわせを感じます。クリスマスが楽しいのは、いろいろなものをわかちあえるからです。天のお父さまは、救い主、イエスさまという一番すばらしいおくり物をくださいました。わたしたちは、このことをきねんして、たがいに おくり物をするのです。

クリスマスのほんとうのいみは、おくり物をするよりも、イエスさまのたん生を思っ<sup>おも</sup>てふかくかんしゃすることにあります。しずかにイエスさまのことを思<sup>おも</sup>うとき、みたまの賜が<sup>たまもの いちばん</sup>一番大切なおくり物であることがわかります。救い主は、進<sup>すす</sup>んであたえることのもはんを<sup>しめ</sup>示してくださり、すべての人<sup>ひと</sup>のためによろこんで命を<sup>いのち</sup>ささげられました。それは、イエスさまのおしえにしたがって<sup>ただ</sup>正しい行<sup>おこ</sup>ないをするすべての人々が、また天のお父さまに会えるようにするためです。なんてすばら





# クリスマス



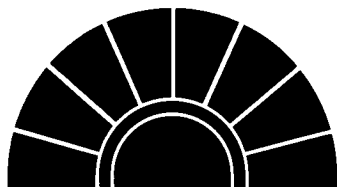
しいおくり物<sup>もの</sup>でしょう。

わたしたちは、イエスさまのおしえにしたがうことによって、救い主<sup>すくぬし いちばん</sup>に一番よいおくり物<sup>もの</sup>をすることができます。すべての人<sup>ひと</sup>を愛<sup>あい</sup>し、だれにでもしんせつにしましょう。びょう気<sup>き</sup>の人<sup>ひと</sup>やかなしんでいる人<sup>ひと</sup>にはやさしくしてあげましょう。むかし、ニーファイが言ったことをおもいだしてください。「……主<sup>しゅ</sup>が命<sup>めい</sup>じたもうことには、人<sup>ひと</sup>がそれを為<sup>な</sup>しとげるために前<sup>まえ</sup>以てある方法<sup>ほうほう</sup>が備<sup>そな</sup>えてあり……」（I ニーファイ 3：7）

クリスマスがおわる前<sup>まえ</sup>に、家<sup>か</sup>ぞくといっしょにルカ伝<sup>でん</sup>のイエスさまがお生まれになったとき<sup>はなし</sup>の話<sup>はなし</sup>をよんでみましょう。（ルカ 2：11）

救い主<sup>すくぬし</sup>も、大<sup>だい</sup>かんちょう会<sup>かい</sup>もせかい中<sup>じゅう</sup>の子どもたち<sup>こ</sup>を心<sup>こころ</sup>から愛<sup>あい</sup>しています。たのしいクリスマスと祝福<sup>しよくふく</sup>されたあたらしい一年<sup>いちねん</sup>をむかえるようおいのりしています。

スペンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー



# 夜の こぼれ日

(ゼラヘムラの人々についてのクリスマス劇)

作：マーベル・ジョーンズ・ガボット

登場人物 キリストの<sup>こえ</sup>声、ニーファイ、コーラス、<sup>せい</sup>く<sup>よ</sup>聖句を読み、  
絵<sup>え</sup>を掲げる<sup>え</sup>子供<sup>こども</sup>(複数)<sup>ふくすう</sup>(絵は、<sup>きょうかいふ</sup>教会<sup>きょうかいふ</sup>付属<sup>ぞく</sup>図書館<sup>としょかん</sup>から<sup>か</sup>借り<sup>が</sup>ること  
ができる) <sup>うたごえ</sup>歌声<sup>うたごえ</sup>、<sup>すうにん</sup>数人<sup>だんにん</sup>の<sup>おとこ</sup>男女<sup>おとこ</sup>

コーラス 「ああ、ベツレヘムよ」(讀  
美歌210番)

聖句 (物語に関連する聖句を読む。  
場面を示す絵を掲げる)

子供1 イエスさまがベツレヘムでお  
生れになるずっと昔、<sup>よげんし</sup>予言者<sup>よげんし</sup>イザヤは、  
イエスさまがマリヤからお生れになる  
ことを<sup>よげん</sup>予言<sup>よげん</sup>しました。

子供2 サムエルは、<sup>じょうへき</sup>城壁<sup>じょうへき</sup>の上に<sup>うへ</sup>立つ  
て<sup>よげん</sup>予言<sup>よげん</sup>しました、「主<sup>し</sup>が<sup>ひとびと</sup>すべての人々<sup>ひとびと</sup>を  
<sup>しはくふく</sup>祝福<sup>しはくふく</sup>するためにおいでになる日<sup>ひ</sup>は<sup>ちか</sup>近い。  
主<sup>し</sup>が<sup>うま</sup>お生れ<sup>うま</sup>になる日<sup>ひ</sup>に、<sup>そら</sup>空<sup>そら</sup>は<sup>ひる</sup>昼<sup>ひる</sup>のよう  
に<sup>あか</sup>明る<sup>あか</sup>く<sup>か</sup>か<sup>やく</sup>が<sup>やく</sup>やく。」

子供3 ゼラヘムラにいたニーファイ  
は、サムエルの言<sup>い</sup>ったことが、まもな  
く<sup>お</sup>ほんとう<sup>お</sup>に<sup>お</sup>起き<sup>お</sup>ることを<sup>し</sup>知<sup>し</sup>っていま



した。夜<sup>よる</sup>になっても空<sup>そら</sup>が暗<sup>くら</sup>くならない  
日<sup>ひ</sup>、その日<sup>ひ</sup>に、ベツレヘムの馬<sup>うま</sup>小屋<sup>こや</sup>で、  
イエスさまはお生<sup>うま</sup>れになるのです。

コーラス 「寝<sup>ね</sup>床<sup>どこ</sup>もなくて」(子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>の歌<sup>うた</sup>)  
F-1)

## 場 面 Ⅰ

ゼラヘムラのとある家<sup>いえ</sup>の居<sup>い</sup>間<sup>ま</sup>。数<sup>すう</sup>人<sup>にん</sup>の母<sup>はは</sup>  
親<sup>おや</sup>が、いすにすわって、ぬいもの<sup>ぬいもの</sup>をし<sup>し</sup>た<sup>た</sup>  
り話<sup>はなし</sup>をし<sup>し</sup>たりしている。

女<sup>おんな</sup> 1 (玄<sup>げん</sup>関<sup>かん</sup>のドアをあけるふりを  
する) よく来<sup>き</sup>て下<sup>くだ</sup>さったわ。さあ中<sup>なか</sup>へ  
入<sup>はい</sup>って、サラ。これで、みんなそろっ  
たわ。

女<sup>おんな</sup> 2 ゼラヘムラに住<sup>す</sup>む母<sup>はは</sup>親<sup>おや</sup>たちが、  
いっしょに断<sup>だん</sup>食<sup>じき</sup>してお祈<sup>いの</sup>りできるので  
うれしいわ。

女<sup>おんな</sup> 3 ほんとうに。今は、たいへん  
なときですもの。

女<sup>おんな</sup> 4 神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>を信<sup>しん</sup>じない人<sup>ひと</sup>たちは、わ  
たしたちが予<sup>よ</sup>言<sup>げん</sup>者<sup>しゃ</sup>サムエルの言<sup>い</sup>った日<sup>ひ</sup>  
をまちのぞんでい<sup>い</sup>って、ものわ  
らいの種<sup>たね</sup>にしています。

女<sup>おんな</sup> 1 日<sup>ひ</sup>がしずむのに、空<sup>そら</sup>が暗<sup>くら</sup>くな  
らないはずはないと<sup>い</sup>って、わらって  
いるわ。

女<sup>おんな</sup> 4 わたしたちの信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>は、なんに  
もならないとも<sup>い</sup>っています。



女<sup>おんな</sup> 3 それに、わたしたちの愛<sup>あい</sup>する  
人<sup>ひと</sup>たちの中<sup>なか</sup>にも、ほんとうの教<sup>おし</sup>えから  
はなれていってしまう人<sup>ひと</sup>がいるのです。  
かなしいことだわ。

女<sup>おんな</sup> 1 まいにちのように、しるしや  
きせきがおきているというのに……

女<sup>おんな</sup> 3 でも、みんながいっしょに断<sup>だん</sup>  
食<sup>じき</sup>して、このように集<sup>あつ</sup>まってお祈<sup>いの</sup>りす  
ると、力<sup>ちから</sup>がわいてきますわ。

女<sup>おんな</sup> 1 では、サラ姉<sup>し</sup>妹<sup>まい</sup>。信<sup>しん</sup>仰<sup>こう</sup>とゆう  
きを持<sup>も</sup>てるように、お祈<sup>いの</sup>りしてくださ  
い。(みんなひざまずく)

## ば めん 場 面 2

ニーファイが家の外で数人の男たちと話している。

男 1 (急いで入って来る) ニーファイ、きいたか。

ニーファイ うん、今、はなしていたところだ。

男 2 わるい人々は、サムエルの言葉<sup>ことば</sup>を信じるものを、すべてころそうとけいかくしている。

男 3 サムエルの予言<sup>よげん</sup>がほんとうに  
ならなければみなごろしだ……

男 2 かぞくをまもらなくては。



男 3 母親たちは、きょう、わたしの家いえに集あつまって断食だんじきと祈いのりをしています。

男 4 しかし、若いむすこたちは、正しいことただからどんどん遠ざとおかっていく。ニーファイ ほんとうにかなしいことだ。うちかえに帰かえって家族かぞくをまもってくだ

さい。わたしは、みんなのために主しゅに祈いのります。(ニーファイ去り、ひざまずいて祈いのる)

キリストのこゑ声 (ニーファイの頭上ずじょうが光ひかりかがやく) III ニーファイ 1:13—14 を読よむ。

## 場 面 3

ニーファイ、人々ひとびとを集めて話あつをする。

ニーファイ 愛する兄弟姉妹あいきょうだいいしまいのみなさん、すばらしいことが起おきました。

わたしたちはめぐまれて、このやくそくの地ちに生うまれ、この世よでもっとも祝福しゆくふくされた日ひをむかえることができました。

女 1 わたしたちは、子供こどもにも、またそのしそんにも、このことを語かたり伝つたえましょう。

女 2 このゼラヘムラに暗くらくならない夜よるがやきって来たことを、だれもわすれることはないでしょう。

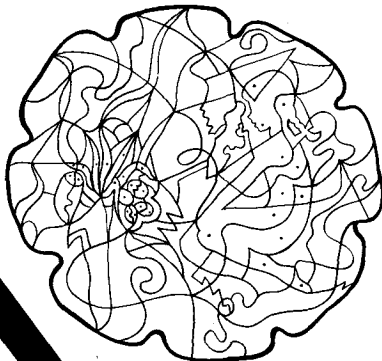
男 1 なんて美しい光ひかりだったのだろう。心こころをいっぱいうつくにみひかりたしてくるようだった。

ニーファイ 太陽たいようの光ひかりとはちがった、清きよい、そしてやわらかな光ひかりだった。なにか、もえるようなものが、心こころの中なかにふかく、しずかに入はいっていくようだった。

男 2 ニーファイ、サムエルを信じしんじなかつた人々ひとびとはどうなったでしょう。予言よげんがほんとうになったことがわかつたでしょう。

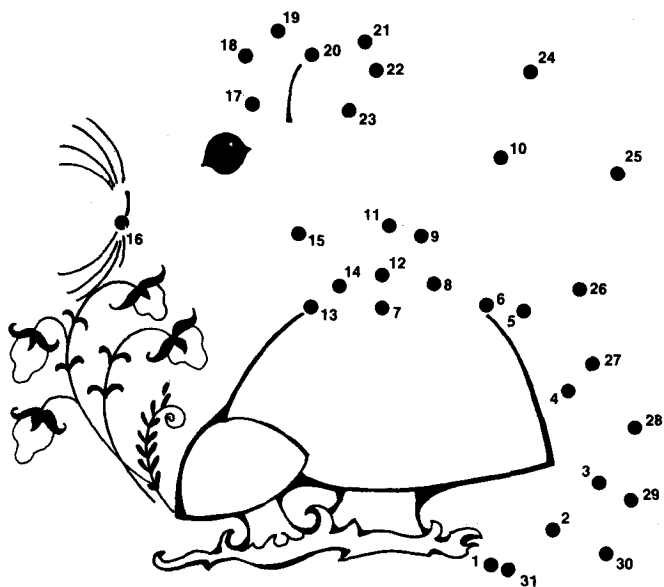
ニーファイ その光ひかりとふしぎな星ほしは、わるい人々ひとびとの心こころをつらぬき通とおしました。かれらは、ころそうとしていた人ひとをはなしてやり、くいあらため、そしてサムエルの言葉ことばを信じしんじるようになりました。しかし、この大きなできごとが、なにをしめしているのかは、信仰しんこうのある人ひとにしかわかりませんでした。ふしぎな星ほしが、神かみのみこであり、人じんのいの救い主すくぬしであるイエス・キリストのたんじようし生うつくを知しらせたことや、美しい光ひかりがやくそくの地ちの人々ひとびとをてりしたことは、こののち、いつまでも人々ひとびとに伝つたえられることでしょう。わたしたちも、このことをいつまでもわすれずに、神かみにかんしゃをささげましょう。

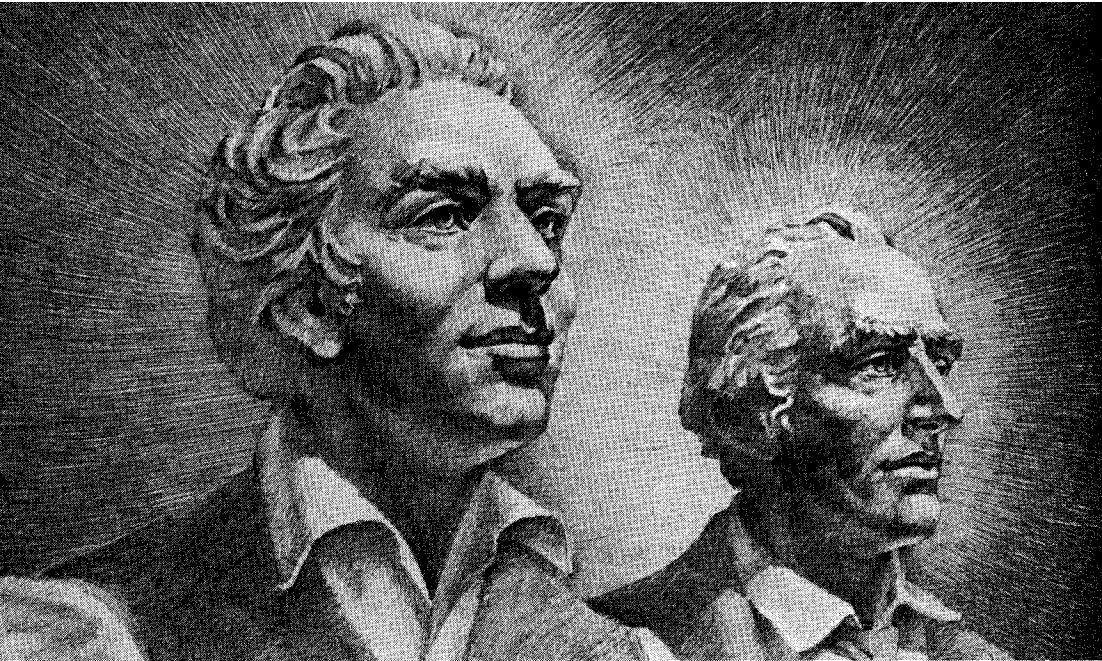
# おもちゃ ばこ



てんのところをぬり  
つぶしてみましょう。  
さあなにがでてくる  
かな。

てんをむすんでみましょう。





歴史に残る末日の予言者の説教

## 最後の神権時代における 最初の予言者

ジョセフ・フィールディング・スミス

ジョセフ・フィールディング・スミスは、1970年1月23日に93歳で第10代大管長となった。老齢にもかかわらず、1972年7月2日、95歳でこの世を去るまで、心身共に精力あふれた人であった。教会幹部として働いた62年の間、教義に関して最も多くの書物や記事を著わしたひとりでもある。ジョセフ・フィールディング・スミスは1876年7月19日、ジョセフ・フィールディング・スミスとジュリア・ラムソンの間に、ユタ州ソルトレーク・シティーで生まれた。予言者ジョセフ・スミスの

兄ハイラム・スミスの孫である。1910年4月7日、父親の第6代大管長ジョセフ・F・スミスから使徒に聖任された。1950年9月30日、十二使徒定員会の会長代理に支持され、1951年4月9日に同定員会会長に支持された。1965年10月29日にデビッド・O・マッケイ大管長の副管長に召され、1970年までその務めを果たした。

次の説教は、1971年5月31日、ミズーリ州インディペンデンスの訪問者センターの献堂式で語られたものである。

**今** 私は皆さんにふたつの偉大な真理に着目していただきたいと思っている。ひとつは、イエス・キリストが神の御子であるということ、もうひとつは、ジョセフ・スミスが予言者であるということである。まず第一に人類に啓示された最も大いなる真理について触れ、その導入をもとに真理について私の証を述べたいと思う。

まず最も簡明な、しかも力強い言葉で述べ

るならば、私たちはキリストが生きていることを信じていると申し上げたい。そしてキリストが神の御子であり、世の救い主であることを、私たちは無条件で受け入れているのである。

またキリストが、アダムの墮落によってこの世にもたらされた肉体の死と霊の死から人類を贖うためにこの世に来られたことを信じている。そしてキリストが血を流されたこと

---

この末日の予言者であり聖見者であるジョセフ・スミスが、この最後の神権時代の幕明けを告げ、地上に完き永遠の福音を回復する最後の人として主イエス・キリストから召された予言者であることを簡明にしかも力強く宣言したい。

---

によって万人に不死不滅の体が与えられ、さらに主を信じ主の律法を守る人々には永遠の生命をもたられるということに、限らない感謝の念を抱いている。

救いは過去、現在、未来を問わず、全能の主なるキリストの贖いの血によってもたらされるということ、しかもそれによって人が前途に広がる王国で無限の光栄を受け継ぐようになるのは、天下にイエス・キリストのみ名をおいてほかにないということを私たちは信じている。

またこの末日の予言者であり聖見者であるジョセフ・スミスが、この最後の神権時代の幕明けを告げ、地上に完き永遠の福音を回復する最後の人として主イエス・キリストから召された予言者であることを簡明にしかも力強く宣言したい。

ジョセフ・スミスはキリストと世の救いについて今日この時代の人々に明らかにする人である。主はジョセフ・スミスに「……今の

代の人々には、汝によりてわが言を与うべし」（教義と聖約5：10）と言われた。

約150年前、復活した天使モロナイはジョセフ・スミスを訪れ、ジョセフの名があらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民の中に善くも悪しくも覚えられ、語られるであろうと告げられた。（ジョセフ・スミス2：33参照）

この約束に加えて、それから15年後、主は自らジョセフ・スミスに現われてこう言われた。「地のいや果にある者すら汝の名を訊ね、愚なる者ども汝を嘲弄し、地獄は汝に向いて怒りを起さん。然るに心の潔き者、賢き者、貴き者、徳ある者たちは汝の手の下よりいさめと権威と祝福とを常に求めん。」（教義と聖約122：1—2）

そこで人々が、この最後の栄えある福音の神権時代に、万物の回復をもたらすために主が召された予言者から得たと同じように、私も主の勧告と権威と祝福を求める人々のひと



りに永遠に数えられるよう願っている。

年々歳々万国の民の中に、ジョセフ・スミスと彼によって回復された福音に心を向け、この世で平安を見だし、来るべき世にあるのは永遠の生命を得る望みを抱いている人が増えていることを心から証したいと思う。

1830年4月6日、教会が組織された直後、主はジョセフ・スミスについて、教会員に次のように言われた。「彼が上より受くるままに汝らに与うる誠命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き、わが前に全く聖き道を履むべきなり。そは彼の言は、汝ら全き忍耐と信仰とを以て、あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。これらのことを為さば、地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して、誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い、汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。主なる神かくの如く言う。われは彼に靈感を与えて、善を為すために大いなる力を以てシオンの大事を推し進めしむ。われ彼の勤勉なるを知り、また彼の祈りを聞けり、然り、われはシオンのために彼の泣き悲しむを見たり。されば、われはもはやシオンのために彼を嘆かざらしめんとす。そは彼がその罪を赦されて悦び、彼の業<sup>わざ</sup>の上に下すわが祝福を示されて悦ぶ時代の来りたればなり。見よ、われはわが葡萄園に働く者に大いなる祝福を与えれば、彼らは彼の言を信ぜん。その言はかの『慰め主』によりわれを通じて彼に与えられ、然もその『慰め主』は、イエスが誠に悔いたる心を持つ者に罪の赦しを与えんがため、世の人の罪を負うて罪深き人々によりて十字架に付けらるることを世に表すなり。」(教義と聖約21:4-9)

この啓示された言葉から、私は次のことを証申し上げたい。

ジョセフ・スミスこそ今日すべての人がキリストとその福音の真理を知るために仰ぎ見

なければならない人である。

やがて時至らば、この予言者の名は全地の隅々、万国の民の間に知れわたるようになるであろう。

心の真っ直ぐな人はジョセフ・スミスを予言者として受け入れ、ジョセフ・スミスが明らかにする主を礼拝するであろう。

神の命令によってジョセフ・スミスを通して組織された教会は、ジョセフ・スミスを通して与えられる啓示に従うことによりて栄え、発展するであろう。

また、ジョセフ・スミスの教えを信じ、ジョセフ・スミスが定めた道を熱心に歩く人は皆、イエス・キリストが神の御子であって、世の罪を贖うために十字架にかけられたことを知るであろう。

私は、聖霊を通して与えられる啓示によって、イエスがキリストであることを知っている。さらに同じようにして、ジョセフ・スミスが昔も今も永遠に神の予言者であることを知っている。

私はジョセフ・スミスの神聖な名前を敬い尊ぶ。ジョセフ・スミスは、私の祖父であり祝福師であった兄ハイラム・スミスと共に、カーセージの牢獄で血をもって証を結び固めた。そして私は、主はこの地上に主の王国を再び確立するために、この時代に力強い聖見者を立て、再び私たちが救いを得ることができるようにして下さったことを全地の隅々に知らせる主の器になりたいと思っている。

今、私は自分の証と感謝の気持ちを込めて、教義と聖約から靈感された言葉を引用してこの話を終りたいと思う。「主の予言者にして聖見者なるジョセフ・スミスは、ただイエス・キリストを除くのほか、この世に生を受けたる何人よりもこの世に於ける人類の救いに尽したり。」(教義と聖約135:3)

主イエス・キリストのみ名により、アーメン。

小柄ながら誇り高い老女が、並んで行進する孫の勇姿を見て叫んだ。「ごらんよ、足並みそろっているのは、私のジョニーだけじゃないかい！」この話はだれでもよく知っていることだが、愛すべきおばあさんが孫息子の欠点を見ようとしないことの古くからの冗談である。私はこの話を聞いて、それっきり頭のどこかにしまい込んで忘れていた。ところが、カナダのブリティッシュ・コロンビア州ビクトリアにあるユニバーシティー・スクール士官学校音楽隊で大太鼓を受け持つようになり、ふとこの話を思い出すことになったのである。

大太鼓を叩く人は肩から皮ひもをかけ、太

## ただひとり 歩調を合わせて

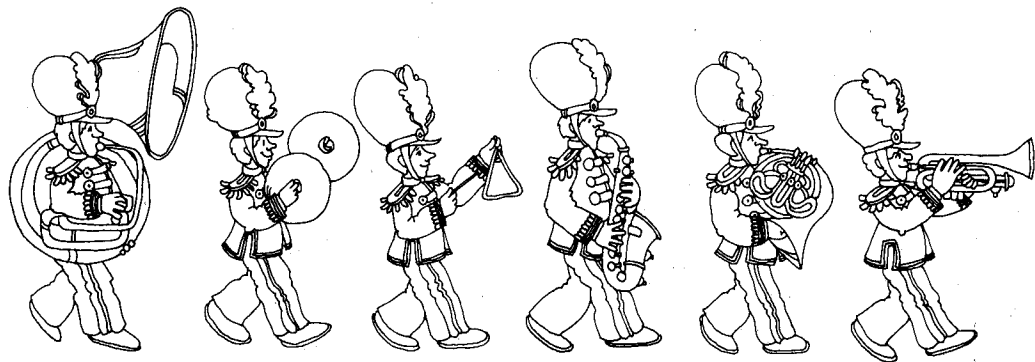
デビッド・ヒュー・バーリー

鼓をつるす。みんなと歩調を合わせて行進しながら、左足が地面に着くと同時に右手を伸ばして太鼓を叩くのである。(その逆もある)その左足、右手の決めが音楽の拍子になっており、これは実に大切な役割を担っているのである。

次に、大太鼓は体と比べても非常に大きい。私が使っていた大太鼓も太鼓越しにかろうじて正面が見えると言った具合であった。もちろん、私のすぐ前の隊員の足を見ることもできず、ただ音楽を頼りに左足と右手の位置で歩調を合わせるしかないのである。

年に一度の閲兵式があるということで、私たちはちょうどそのリハーサルをしていた。士官学校の生徒たちは大抵構内の車道を行進して運動場に集合するようになっていた。音楽隊がパレードの先頭に立ち、3列縦隊で各小隊が続き、全員が拍子に合わせて行進した。

第2次世界大戦中、北アフリカ戦線で戦った英国陸軍の雄ジェンジ氏が演習の指揮をとった。学校にはブラウンという姓を持つ者が4人もいたので、それぞれブラウン1世、2世、3世、4世という呼び名を使っていたが、そのジェンジ氏をブラウン1世とみんなは呼んでいた。ブラウン1世は195センチほどの



長身で、大きな銀色のバトンというか、つえのようなものを持ち、いろいろな方向に振り回し音楽隊に指示を出していた。

朝の陽光が、磨きあげた楽器に反射してまばゆかった。その上アイロンをかけたばかりの制服を着込んだ私たちは一段と凛々しく思われた。

ジェンジ氏は持ち前の高い声でいつもの指示を出した。「全体、3列縦隊で右へ進め！」

ところが、この時、どうしたことが、ブラウン1世が反対の足を踏み出した。こんなことは今まで一度もなかった。しかし、彼は音楽隊全員の面前でまったく歩調を狂わしてしまっただのである。たちまち隊に連鎖反応が起こった。音楽隊の最前列がブラウン1世の歩調と違うので自分たちが間違っていると思ってブラウン1世の歩調に合わせた。その他の列もすばやく前に歩調を合わせた。しかし大太鼓奏者だけは合わせなかった。前にも述べたように、太鼓の向こう側が見えないので、他の人の歩調がどうなっているかわからないのである。ただ音楽を聴き、その拍子に合わせるしかなかったのである。

「バーリー、ステップが違うぞ！」左側にいる小太鼓奏者がささやいた。

私は音楽のリズムに気を付けながら2、3歩行進してみたが、歩調は間違っていない。

「いや、間違っていないよ！」小声で言い返した。

「バーリー、ステップが違うんだ！」今度は右隣りのプライスが言った。「違ってないよ！」と私は言い張った。続いてジェンジ氏がかかなり穏やかな口調で「バーリー、ステップを変えたまえ！」と注意した時は、身がすくむような思いがした。

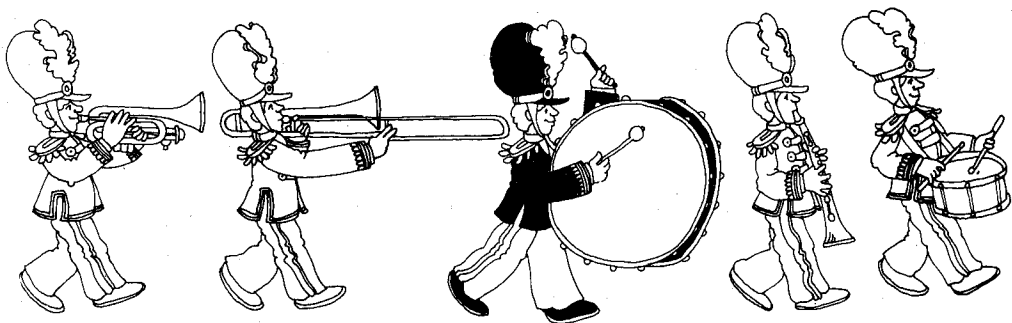
「しかしながら、私は音楽に合っております」と私は異議を申し立てた。

ジェンジ氏は一瞬ぎくっとしたようだった。生徒が上官に口答えをするなどめったにないことなのに、命令までも拒否してしまったからである。ジェンジ氏は私を見ながら音楽を聴き直した。すぐに「そうか、君が正しい！」と大声で言った。

それからパレード始まって以来、前代未聞の号令がかけられた。「バーリーを除き、全員歩調変更！」

生徒全員が、音楽の拍子と私の歩調に合わせてステップを変えた。

あの時の出来事を、人から言われない限り覚えている人はそれほど多くいないと思う。



私も、それから2、3年後にあることがあって歩調を乱すということについて改めて知ることがなかったならば、その出来事をとうの昔に忘れてしまったに違いない。

オッキー・ケント、コリーン御夫妻は、私がこれまで出合ったどの家族ともはっきりと違っていた。彼らは私に心からうちとけて話をしてくれたし、彼らが互いに愛し合っていることをはっきりと示してくれたのである。そしていかにも幸せそうで気が安まる居心地の良い家庭だった。しかも家の中に灰皿がひとつもない。彼らは、私が仕事の関係で知り合った他のいろいろな家族とまったく歩調が違っていたのである。

居間のサイドテーブルの上に、モルモン経の大きな本があった。若い頃に1、2章読んだことがあったが、私は改めてその本に心を引かれた。オッキー夫妻は私の質問に気軽に答えてくれ、またいらっしゃいと勧められた。それから宣教師に紹介され、勉強と祈りと探求の日々が始まった。それから23日後、私はバプテスマを受けた。私はようやく自分の歩調が合っていると感じる事ができた。それから今日までずっと、主が任命された指導者の導きに歩調を合わせるように努めてきた。

教会に関する知識が増すにつれて、福音の歴史は、たとえ仲間から遅れていると見られるようなことがあろうとも、世の人々に同調することなく、主と歩調を合わせて行進する人の歩みであると思うようになった。

モーセは宮廷で贅<sup>ぜい</sup>生活にひたっていることもできた。しかしヘブル人の解放をめざして迫害に立ち向かった。ダニエルは当時の社会の慣習となっていた偶像崇拝を拒否した。モルモンは腐敗し、絶望的な社会にあっても世の退廃に屈することがなかった。これらの予言者たちは、時代の勢力に従うよりも主に

聞き従う道を選んだのである。

また、私たちの神権時代にも、ジョセフ・スミスに同じような模範を見ることが出来る。一時は彼ひとりしかいなかった。しかしその後3人の見証者が出、さらに8人の見証者が出て、同時に大勢の人々が教会に加わったのである。これらはすべてたったひとりで歩き始めた道にすべての人が歩調を合わせたことにつながっている。そして今では、400万を越える末日聖徒が真理の行軍をしているのである。

しかし、私たちが互いに歩調を合わせ、主と歩みを共にしているとはいえ、私たちはいまだ世のすう勢とはかけ離れた存在である。私たちは他の人々と異っており、それ故に今後ますます人々の注目を集めるようになるであろう。

私たちは決して完全ではない。しかし、事実、歩調の合っている唯一の民であることはだれもが承知していることである。音楽をこよなく愛し、真理を真剣に求める人々は他にも大勢いるが、本当の歩調で歩んでいるのはこの真の教会しかない。

私たちの歩調が違っているとささやいたり叫んだりする人は世に大勢いる。しかし私たちが毅然とした態度でしっかりと立っているならば、いつの日か人類の至高の指導者である大いなる主がやってくる、ジェンジ氏が生徒たちに言ったと同じことを言われる日を待ち望むことができるであろう。

「世の人々よ、信仰に忠実な末日聖徒を除き、全員歩調変更！」

そしてその時、自分たちが主の再臨に対してこの世を備える業にいそしんできたことを知り、必ずや感激に身を震わせることであろう。

# ジョセフ・スミスが 若人に寄せた期待

ウィリアム・G・ハートリー

**私**たちは、予言者ジョセフ・スミスが教会のためになした功績についてはよく研究し、討論し、知ってはいるが、彼が若人にどのような関心を向け、どのような貢献をしたかについて話し合うことはほとんどない。しかし、若人を対象とした教会プログラムの根底に流れている姿勢は、予言者ジョセフ・スミスが当時の若者たちにどういう期待を寄せていたかということに具現されていると言っても過言ではない。

当時の「若人」という言葉は10歳の少年から25歳の青年に至るまでかなり広範囲に使われたようである。思春期がやってくるのは遅

く体の成長も今よりずっと緩慢で、背の伸びが止まるのが25歳前後であったからかもしれない。簡単に言えば、成熟が早い若者は年齢如何にかかわらず、自分でできさえすればすぐにでも大人の仲間に入ることができたのである。

予言者はそうした若者に関して、かなり明確な必要性を4つあげている。(1) 大人の愛情、思いやりと、指導が必要である。(2) 労働と娯楽をほどよいバランスで行なう必要がある。(3) 学業が必要である。(4) 宗教教育が必要である。

大人が示す愛情、指導、思いやり。ジョセ



フ・スミスは若人を愛し、若人を大切にした。エマとの間に生まれた10人の赤ん坊のうち5人までを亡くしたことからしても、ジョセフ・スミスが、若人へ格別な思いを持っていたことを伺い知ることができる。

そのほかにもジョセフ・スミスが若人に大きな関心を寄せたことを物語る例は数多い。ある時、ジョン・ペローズという少年が父親と一緒に予言者の家を訪れた。するとジョセフ・スミスは大人同士の話の合間に「かなりの関心を私に示して下さい」その少年は自分の存在価値を改めて知ったという。ウィリアム・H・ウォーカー氏はジョセフ・スミスが、マンション・ハウスで働いていたひとりの少女を客が侮辱しているのを見て、その男に「お金はいらない。君のような人からはびた一文受け取る気はない」と言って勘定を払わずに外に追い出したと語っている。また、ウォーカー姉妹が亡くなった時には、ウォーカー家の10人の子供の何人かを一時期エマとジョセフが引き取って育てたこともある。その子供のひとり、ルーシー・ウォーカーはこう書き残している。「いつでも私たちはとても大事にされました。」ジョセフ・スミスはルーシーの兄弟のローレンを、信頼し合う親友のように扱った。「彼はいつもローレンと一緒にでした。腕を組んで歩き、いろいろなことについて腹藏なく話し合っていました。」予言者がヘス家に客として滞在していた時も、勉強に飽きてくると、14歳のジョン・W・ヘスをまじえて子供たちと家のまわりを走りまわって楽しく遊んでいた。

ジョセフ・スミスは若人を大切にしたが、同時に若人にもそのような振舞いをするように願った。ガウディー・H・ホーガンは14歳だったが、ある時ノーヴー神殿近くの森で行なわれた日曜日の集会で、ジョセフ・スミスのすぐうしろに座っていた。すると、予言者

は話をしている長老に中断させ、聴衆に向かってこう言った。「会衆から離れて少女たちに大声で話しかけている青年たちは迷惑なので話をやめ、両親の意向を聞いて、家に帰ってから話をしてもらいたい。」それでも一向に静かにならないので、ジョセフは壇から下りて、人々の間を通って青年たちのところへ行き、話をした。「それからは集会中に騒ぐことがなくなった」とホーガンは記している。

労働と娯楽をほどよいバランスで行なう。ジョセフ・スミスは若人には労働と遊びの両方が必要だと思い、彼自身もそれを実践した。重労働をものともしない予言者については、いろいろな話が伝わっている。例えば、20代前半に3年ほどジョセフと共に働いたウィリアム・ウォーカーはこう述懐している。「私は彼と一緒に干し草畑に行き、大鎌で草を刈ったが、彼は毎日10時間ほどのきつい仕事を何日も続けた。」

歴史家のT・エドガー・ライアンは、少年の頃ノーヴーに住んでいた時、同じワード部の老人から聞いた話を語ってくれた。その老人は、十代の時にほかの仲間と近所の農園へいたずらをしに入り、怒った主人に捕まってしまった。判事は投獄を命じたが、少年の父親がジョセフ・スミスに仲裁を頼んだ。獄舎の苦い経験がまださめやらぬ予言者は、少年たちを半年間自分の保護下に置くことを判事に願い出た。そして、ふたりの少年にはノーヴーのでこぼこ道を補修するための石片や砂利の運搬をさせた。彼らは日に50セントをもらい、その中から農園主へ弁償をし、そして裁判費用を支払った。その兄弟はこう告白している。「あれは人様の物をむやみに壊してはならないという最高のおしおきでしたし、きちんと働いて正当な報酬を得ることを教えてくれた最高の訓練でもありました。」

ジョセフ・スミスが、棒相撲やレスリング、

球技、水泳、狩りなどを好んでやっていたことは一般によく知られている。ジョセフ・スミスと何度も球技をしたことのあるウィリアム・アルフレッドは、予言者が遊びにうつづを抜かしていると非難された時のことをこう述べている。ジョセフはその批判に応じて予言者と獵師のたとえ話をし、遊びと仕事の関係について自分の考え方をはっきりと説明した。そのたとえ話とはこうである。ある予言者が木陰で「何か気晴らしを」していた。そこへ獵師が通りかかって予言者を非難した。すると予言者は獵師に、あなたはいつも弓を引きしばっているかと聞いた。獵師は、「いいえ」と返事をした。

「それはどうしてですか。」

「そんなことをしていたら弾力がなくなります。」

「私の心もそれと同じです。」予言者は言った。「四六時中、引きしばっていたくないのです。」

学問。ジョセフは限られた学校教育しか受けることができなかったが、それでも勉強や学問を心から愛していた。教師の友人たちの影響も幾らかあったであろう。彼の父親も教鞭をとった経験がある。母方の祖母は教師で、彼の母に読み書きや算数の基礎を教えた。ジョセフの妻も学校教師で、「自由な文化と教育尊重の思想を持つ女性」であった。また、モルモン経を翻訳した時の当初の筆記者は教師のオリバー・カウドリであった。

ジョセフ自身も、聖徒たちに教育を受けるように呼びかける数々の啓示に従おうと努めた。主は、「汝ら最も善き書より智恵ある言葉を深し求めよ。……学問を求むべし」（教義と聖約88：118）と言い、また「学修研究してあらゆる善き書に通じ、また諸々の国語と諸々の言葉と国民とに通ぜよ」（教義と聖約90：15）と言われた。そして天上、天下のこと、

天文、地質、地理、歴史、政治、時勢についても知るべきであると言っておられる。（教義と聖約88：77—80参照）

ところがジョセフ・スミスは、自分のように教育に乏しい改宗者が実に多いことを知った。「14歳過ぎまで親たちと共に過ごし、しかも長男なのでいつも働いてばかりで、ほとんど教育の機会もないできた」ハリソン・バージスのような人たちが大多数を占めていた。そこで、公立の学校もなく、ただ教会での学校か、個人的な学校がわずかあるだけで、家庭教師を自分で雇うしかなかった時代に、ジョセフ・スミスは時代に先がけて教育の改革者となったのである。

末日聖徒の大規模な入植地には、必ずと言ってよいほど学校ができた。カートランドでは、予言者の塾に加えカートランド高等学校がジョセフ・スミスにより創立され、一時は140名もの「青少年」がここで勉強した。授業は数学、地理、文法、書き方、読み方、国語などであった。学期末ごとに、大管長会を含む理事たちの前で試験が行なわれた。また、同じカートランドにエライザ・R・スノーが「若い女性たち」を対象とした学校を開校したが、これはカートランドで開校された2、3の私立学校のはじまりとなった。ミズーリ州では、ジャクソン郡に初めての学校を設立した。

ノーウーでは、市の憲章に各ワード部単位の公立小学校から青少年の高等教育、青年や成人向けの大学まで、学域制学校制度が盛り込まれた。歴史家によれば、ノーウーには教師として働いた男女が何十人もいたという。教育を受けたい者にはだれにもその門戸を開放したこの制度は一般の税収入によって運営された。これは当時としては画期的な考え方であった。

宗教教育。ジョセフ・スミスは、子供に宗

教教育を施す責任は両親の双肩にあるという「シオンに住める者の律法」(教義と聖約68:25—28)を心から支持していたが、教会がその両親を支援しなければならないことも承知していた。末日聖徒の学校では聖典から読み書きが教えられた。そのために聖典や結婚を若人の目標とするキリスト教徒の原則を唱える公の説教集などが刊行されるようになった。記録によれば、若者たちは日曜日の礼拝に出席し、個人的に行なわれる夜の祈り会にも参加して教えを受けていたという。カウディ・ホーガンは14歳の時に、「しばしば父親と一緒に家から13キロも離れたノーヴーの集会に歩いて来ていた。そして主の僕たちの言葉を聞くのをとても楽しみにしていた」と記している。同じ14歳のメアリー・アリス・キャノンも、予言者の説教を何回となく聞いたという。

ジョセフ・スミスは、ヒーバー・C・キンボールの指導下に発展した「ノーヴーでの若い男性の組織や若い女性の扶助協会」を熱心に支援した。この会の発端は少人数の普通の討論会からであった。しかし週を重ねるごとに参加者が増え、会場はだんだん大きな所に移っていった。ある時、予言者の店の二階にある大部屋で会が持たれ、予言者が招かれて若者たちに話をした。彼は、この「すばらしい良きわざ」を推進してきたキンボール長老を讃え、さらに若者たちの善い行ないをほめ、「あらゆる場での振舞い方と彼らの義務を教え、貧者救済の団体を結成するよう勧めた。」そして実際に、足の悪いひとりの兄弟のために基金を集め、家を建てるようお願いした。若人はそれに応えて早速、組織を作り、役員を選出し、月例の集会を開いた。そして教会員、非教会員を問わずノーヴーに住む30歳未満の男性や「優しく美しい素敵な町の女性たち」に入会を呼びかけた。

若い女性は大人の扶助協会にも出席した。1年前に扶助協会の初めての集会が開かれた時、出席者20人にまじって3人の十代の姉妹がいたのである。

当時の神権活動にはほとんど教会の青少年は参加しなかった。年齢ではなく考え方の円熟さが前提条件になっていたからである。しかし、数多くの青年が教会の役職を立派に果たしたことは皆さんも御承知の通りである。オルソン・ブラットは18歳で宣教師になった。(教義と聖約34章参照)後に若くして十二使徒となったライマン・ジョンソンも、20歳の時に伝道している。15歳でバプテスマを受けたジョージ・A・スミスはシオンの陣営に加わり、その後18歳で七十人第一定員会会員に聖任された。ピーター・ホイットマー・ジュニアは、19歳で8人の見証者のひとりになった。18歳そこそこのダニエル・タイラーは、年上の同僚が挫折したにもかかわらず、ひとりで伝道を完うしている。ジョセフの弟、ドン・カルロスは14歳で神権を受け、その年に伝道し、19歳で大祭司定員会会長になった。エラスタス・スノーは14歳でバプテスマを受け、オハイオ、ニューヨーク、ペンシルベニアと広大な地域に福音を宣べて回り、19歳になる前にバーモント州で伝道を終えた。ウィリアム・F・カフーンは17歳の時に教師に聖任され、ジョセフ・スミスの家族のホームティーチャーとなった。

予言者の公けの席でなされた説教で残された記録が少なく若人について言及しているところもあり多く見いだすことはできないが、それでもほかの記録から予言者が若人を軽視していなかったことはよくわかる。ジョセフ・スミスは若人をこよなく愛した。若人と交わり、若人を教えた。また若人のために学校を建て、若人を啓蒙する組織を奨励した。ジョセフ・スミスの模範は、それを如実に物語っている。



# 「主にあって不可能なことはない」

H・ダイク・ウォルトン

**私**は、その道の専門家でも何でもなかった。しかしこの小さな部屋にいるレジー、ロバート、チャールズ、そして地方部長のドンは、少なくとも私が一端の<sup>いっばし</sup>玄人<sup>くろうと</sup>であると思っている。彼らは新しく教会堂を建てるために私の助けが必要であった。私もそのために派遣されてきたのである。

しかし、専門家でもお手上げの場合もある。必要な資金を獲得する確実な方法を知りたがっている彼らに、私は何と答えればよいのだろうか。差し当たって無難な方法は教会員の

献金である。しかし、それだけで巨額の献金を集めることは無理だという。少なくとも彼らにはそう思われた。金持ちの人でも、かなり厳しい生活を強いられていたからである。

しかし私にはほかに方法は考えられなかった。私はこう言った。「とにかく、教会員からお金を出していただくしか方法がないことは確かです。」

彼らはうなずいたが何も言わなかった。それでは問題の解決にはならないことはだれもが承知していたからである。



そこで、私はさらに進めて話をした。「まず、ここにいらっしゃる皆さんが第一に決心することです。それかなりの金額を出してもらうしかありませんね。」

彼らの表情から、ショックのほどがうかがわれた。

「人は指導者の模範に従うものです。自分にできそうもないことを、人をお願いすることはできません。皆さんが決心すれば、主は必ず助けて下さいます。綿密に計画し、熱心に努力すれば、何でもできます。」彼らはうなずいていたが、いくらか逡巡していることも明らかであった。4人のうちふたりはすでに退職し、ささやかな年金で生活している身であり、ひとりとは請負い、あとのひとは日雇い仕事といった状態で、それぞれ少ない収入の中から家族を養っていた。

その集会が終ると、ドンがチャールズと一緒に車で私をホテルまで送ってくれた。私が車から下りると、チャールズがドンに向かって言った。「ここからはバスで帰りますよ。ウォルトン兄弟と少し話がしたいので。」

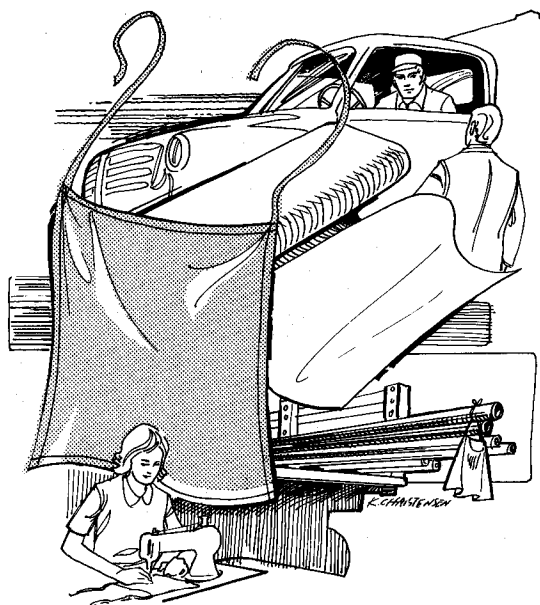
「いいですよ。それじゃ、次の集会に間にあうように、7時にまた迎えに来ますので。」ドンは笑顔でそう答えたが、それでも献金のが頭にこびりついているのか、何となく心配そうなまなざしだった。

チャールズと私はホテルのベランダの階段を上って行き、小枝を編んで作った椅子に腰をかけた。顔をみると、これまでの身を削るような労苦の跡が見えるようである。私たちは並んで腰かけ、椅子を揺すりながら通りの向こう側に広がる緑の公園とその背後に見えるインド洋をじっと眺めていた。

やっとチャールズが口を開いた。「先程のお金のことなのですが、私は毎日一定の年金をもらって暮らしているだけで、ほかに収入の

あてがありません。体の状態も決してよいとは言えず、毎日妻とふたりで支払いに追われている次第です。正直言って、私たちにはできそうもありません。とてもこれだけの大金を、いやそれ以下でも無理だと思います。」私はこれほど謙遜な人をここまで追いつめてしまったことを後悔した。そして自分の分担さえ満足に払えない不甲斐無さをくやしく思っているようだった。「ほかの人も私と似たりよったりだと思います。こうした大事業をするのは、私たちにはまだ早すぎるのかもしれない。」彼は悲しそうに言った。

私は、チャールズの心の負担にならないように何も言わなかった。しかし心の中では、不可能を可能にした人々の努力の物語が記されている歴史のひとつを思い出していた。最後に私はこう言った。「このことについて奥さんとよく相談して、祈って下さいませんか。」



私とかほかのだれかとかではなく、これはあなたと主との問題です。」

チャールズは立ち上がって握手をした。小柄で青白く、握った手の力も弱々しかったが、目には誠意があふれていた。彼は階段を下りて、通りを渡っていった。恐らく私の視線を背に感じたのだろう。最後にうしろを振り返って大きく手を振って去っていった。

私が自分の部屋へ戻ろうとすると、レジーがやって来て、私に手を振って車から降りた。若くて屈強な彼は一気にふたつつつ階段を駆け上ってきた。それから彼は自分で細々としている仕事のことや幼ない子供たちのことなどについて話し、どのようにしたらそのチャレンジに 대응することができるかまったく見当がつかないと言った。

私は彼の肩をつかんでこう言った。「そのことについて家族でよく話し合い、そして主と相談して下さい。皆さんは私のために教会を建てるのではありません。主のために建てるのです。きっと主がその道を備えて下さっているはずです。大切なのは、あなたが气落ちしないことです。だれも力以上のことを要求したりはしません。」

レジーは急いでいた。それ以上私は何も言う必要がなかった。私は、この指導者たちが決心できなければ、教会員にも応えてもらうことはできないと思った。レジーのことをあれこれ考える暇もなく、彼のうしろ姿がまだ視界から消えないうちに、ホテルの若い従業員が電話だと私を呼びにきた。

電話はロバートからだった。彼は退職した元郵便局員で、体格もよく、つい最近、教会に改宗したばかりである。彼はたどたどしい口調で、電話を通してチャールズが言ったのとまったく同じことを繰り返してきた。「わずかな年金だけで……収入は決まっています

し、……」

電話の場所がロビーのフロントということもあって、まわりには人がたくさんいた。私はこんな場所でロバートの収入を云々するのはよくないと思い、じっと彼の言うことを聞いていたが、こう一言申し上げた。「私のほかにご相談なさる方がいらっしゃるのではないですか。」

しばらく彼は電話の向こうでだまっていたが、こう言った。「わかりました。それじゃ、集会でまたお会いしましょう。」

彼らが教会と呼んでいる赤いレンガの小さな建物には教会員が所狭しといっぱい詰めていた。窓を全部閉めても、隣りの家のラジオの音が壁を通して聞こえてくる。いつもと変わらないごく普通の集会だった。前日の午後の出来事にもかかわらず、地方部長や副地方部長たちが新しい建物のためにそれぞれチャレンジに応じて献金すると発表した時も、私は別段驚かなかった。彼らの話は短かったが、誠実さにあふれていた。会員たちも、努力してやってみようという気になっていた。

翌日、私は安心してシドニーへ帰った。お金は集まるだろう。建物は建つに違いない。私に残された仕事は、教会建築部の監督との調整だけである。私は電報でソルトレーク・シティにすぐ監督を派遣してくれるように要請した。

パースからの最初の数週間の報告は、あまりかんばしくなかった。献金はあったが、決して十分とは言えなかった。そこで私は、いつになったら工事開始にこぎつけられるかもう一度この目で確かめてみようと思ってパースへ行くことにした。監督に、作る建物もなくパースで腕をかがえてすわっていてもいいし、たくなかったことも事実である。私はドンに電報を打ち、それから1週間後に再びあの4

人と会った。ところが今度は皆、前になかったほど興奮しているのである。私はどうしたのだろうかと考えてみたが、思い当たることもなく、尋ねてみた。

「私はどのようにしたらチャレンジに答えられるか見当もつきませんでした。それでもとにかく献金しようと妻と話し合ってなんとかやってみることにしました。その約束をした後ある農園に仕事の交渉に行ったところ、すぐに野生の花の種を買ってくれることになりました。西オーストラリア地方でとれる世界で一番美しい花の種です。幸運でした。その農園はアメリカの会社からちょうどその種の注文を受けたばかりだったのです。私たちは土曜日や仕事が終わった後できる限りの時間をとって家族総出で種を集めました。そして約束した金額だけでなく、ほかにもたくさんの恵みを受けることができました。資金作りは子供たちにとっては家族みんなの遠足のようなものでした。以前にはとても考えられなかったことも家族で計画して実行できるようになりました。」レジーは私たちをじっとみつめてこう言いました。「この献金によって私たちは確かにたくさんの祝福を受けることができました。」

次にロバートにも報告してもらった。ロバートは足を組み、にこやかな顔で身を乗り出して話し始めた。

「レジーと同じように、私もどうしたらチャレンジに答えられるか、まったくわかりませんでした。あの集会の前後、私は何度か主に祈りました。本当に助けが必要だったのです。その次の朝、私のところに旧友から手紙が届きました。息子さんがこちらの大学に入るので下宿を捜しているということでした。我が家は子供たちも皆結婚して家を出ていますので、部屋が空いていました。その青年が我が

家に住むようになってもう2週間たちましたが、お陰で家の中が本当に明るくなりました。彼はまじめな青年で、一緒に生活できるのをとても喜んでいます。まだこの教会にも集ったことがありませんでしたが、最近私たちと一緒に教会にも来るようになりました。」

「それで献金のことはどうなりましたか。」ドンが目を輝かせて聞いた。

「ああ、そうですね。彼のお父さんが、学期始めにまとめて送ってきました。それがちょうどチャレンジされた額と同じだったので。食事代の方は私たちに一人、二人増えてもたいして変わらないんです。特に畑には野菜も作っていますから。」彼はほほえんだ。私は喜びで胸がいっぱいになった。「お金が入ったばかりか、生活に張りが出てきたのです。」

それからドンはチャールズの方を向いた。「あなたはいかがですか。」

「私もどうしたらよいかわかりませんでした。主の家のために捧げる献金をどうやって都合すればよいか、皆目見当もつきませんでした。そこで私も、自分の問題を主に話し、自分のチャレンジに答えられるように主の助けを求めました。」

あの集会のあった翌朝、町の通りを渡っていると、荷台からはみ出すほどたくさんの材木を積んだトラックが走ってきました。私はあやうくその材木にぶつかりそうになりました。私だけじゃなく大勢の人々が危ない目にあっていました。材木の端に赤い布も結んでないので、私は腹が立ってきました。家に帰ると早速警察署長に電話しました。すると法令では赤布をつけることになっているが、トラックに合う適当な旗がないので、強制もできずにいるという返事でした。」

チャールズははやる気持ちを抑えるように大きく息を吸って続けた。「今、私は妻と一緒に



に町中の赤い布を買ってきて、それを法律で定められたサイズに切りました。妻が縫い、私が材木を結ぶ丈夫な麻ひもを通しています。トラック業者に数軒あたってみましたが、注文に応じきれないほどです。おまけに退屈だった毎日が生き生きしてきました。ささやかな商売ですが、建物が完成したあとも続けて収入の足しにしたいと思っています。もちろん、約束は果たしました。この次はもっと大きなチャレンジに応えることができると思います。」チャールズは満ち足りた笑みを浮かべて椅子に深々とすわった。それは単なる感謝以上のものであった。

次はドン番である。

「あの資金獲得の話が出た翌週の月曜日の朝、早朝セールス・ミーティングに出たんです。その後で、マネージャーが、在庫目録をつけるのに正直者の適任者がみつからないとこぼしているのが聞こえてきました。そこで

私は彼のところへ行って、妻と上のふたりの娘と自分を推薦したわけです。最初の給料をもらいましたが、それがちょうどチャレンジされた額と同じだったのです。6カ月後には、またたな卸しがある予定ですので、その時も働きたいと思っています。それからもうひとつ、私たちの働きぶりが上司の目にとまって、私は昇給しました上に、次の昇進まで約束してもらえました。」

私は部屋の中の一人一人の顔を見つめた。だれもが主の助けを得て、約束を果たした満足感をただよわせていた。たとえ自分には不可能だと感じていたとしても、主にあって不可能なことはないことをこれほど強く感じたことはない。あの忠実な聖徒たちは見事従順と努力によってそのチャレンジに答えてくれた。そして主は、天の窓を開き、あふれんばかりの祝福を彼らの上に注いで下さったのである。

# クリスマスおめでとうございます



私たちの救い主、イエス・キリスト様のお誕生をお祝いする尊いクリスマスの時期になりました。

イエス・キリスト様御自身の教会の会員である私たちは、このクリスマスの時期に、神様に喜ばれるクリスチャン、またモルモンとして生きる決心をしましょう。

そのためにも聖文をよく研究し、現在予言者の語られていることをよく学び、常にみたまの声を聴くことのできる生活をしようではありませんか。

1980年は日本全土が天与のあふれる恵みを受けるすばらしい年となることでしょう。

兄弟姉妹の皆様、より力強く神の王国をこの日本に築くため、昔のエノクの町の兄弟姉妹たちと同じように、一つの心になって天父に御奉仕しようではありませんか。

代表役員

菊 地 良 彦



## 全日本の兄弟姉妹の皆様へ

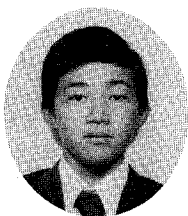
去る9月3日から13日まで来日されたモルモン・タバナクル合唱団の日本公演は、兄弟姉妹の皆様の御支援をいただき、すばらしい成功をおさめました。ここに厚く御礼申し上げます。

代表役員

菊 地 良 彦

タバナクル実行委員長

中 村 武 史



福岡ワード部  
福田 満  
(中学3年)

## 什分の一の大切さ

今年5月10日、私は生まれて初めて、夕刊の新聞配達を始めました。それから約4カ月、たくさんのつらいこと、楽しいことを経験しながら今も続けています。

私は、この新聞配達を通して、「什分の一の大切さ」ということについて、もう一度良く考えることができました。小さい頃から、たくさんの人が什分の一について、証をするのを聞いてきました。それでも時には、什分の一を納めるのがのびのびになり、まとめて払ったりして大抵は調整ができませんでした。それで、新聞配達を始めたのを良い機会に、考え直しました。

私たちの教会では盛んに什分の一を納めるようにと言っています。「いったい、どうしてだろうか。」私も小学校2～4年の時にはよくそう思いました。でも、什分の一には大切な意義があることを今はよく知っています。

では、いったいなぜ、什分の一を納めるのでしょうか。それは、私たちの持ち物（衣食住）はすべて神様からいただいたものだからです。ですから、私たちは、親類や友人その他の人から、いただいたもののお返しをするのを礼儀とする様に、受けている祝福に対して神様に感謝のささげ物をするためです。

私は、新聞配達を始めてある程度まとまった給料をもらうようになり、その中から什分の一を取る時に、「これだけあれば、自分の好きな物が買えるのになあ」と思うことがあります。でも、その気持ちを乗り越えて什分の一を納めた後は、神様の信頼に答えたと言う思いで良い気持ちになります。

また、残ったお金を1カ月間、上手に使うこともできます。

そのように、がまんして納めることにより、克己心を養うことができるようになってきました。

本当に神様は不思議な力を持っていらっしゃいます。

これからも、神様に対する感謝の気持ちをいっそう高めるために、忘れずに、什分の一を納めていきたいと思えます。

この証をすべてイエス・キリストのみ名によってお話いたします。アーメン。

伝道は、教会と世の人々を強める原動力です。かつてデビッド・O・マッケイ大管長は「教会員は皆、宣教師である」という言葉をもって伝道の大切さを説かれました。今日でもそれは、末日聖徒の生き方を示すものとなっています。今、ここにその教えを日々、実践されている兄弟を紹介したいと思います。

仙台でタクシー運転手をしている菊地利夫兄弟。彼のそのユニークな「ハンドル伝道」は、私たちがどのような場にあっても、福音を宣べ伝えることができることを示して下さいます。以下は菊地兄弟の証です。



## 私にできる ハンドル伝道

仙台支部  
菊地 利夫

2年程前、試練と苦難の日々の中で人間以上の力を感じ、神様の存在を考えるようになりました。以前から人間らしく生きたいと思っていましたので、「神様は人間がどのように生きることを望んでおられるのだろうか」と考えはじめました。自分なりに「人間らしく生きよう」と努力していたのですが、もう少し何か具体的な生き方を知りたいという気持ちが強まってきました。タクシーを運転しながら街を走っていますいろいろな教会の前を通ります。教会に行ってみようとも思ったのですが、どこの教会が正しいのかわからず、仕事を続けていました。そんな日々が続

いた中で、ふと気付くと、自転車に乗った外人のふたり連れに、最近よく出会うのです。1日に5,6回も見かけます。やがて教会の前を走った時、彼らが末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師であることがわかりました。

この外人連れによく出会うのは、神様が「あの教会へ行ってみなさい」と導かれているのではないだろうかと思うようになりました。ある晩、私の家に戸別訪問の宣教師がふたりお見えになり「末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です」とおっしゃった時は、「これが真実の教会で、神様は私をそこへ導かれた」と直観的にわかりました。宣教師が若い





のでちょっと驚きましたが、レッスンはとても印象的でした。特に「人生の目的」で前世、来世の存在を学んだ時は「やっぱりそうであったか」と心を打たれました。自分なりに何かを感じていましたが、宣教師からはっきり学び、心が落ち着きました。やがて喜びの中でバプテスマを受け、教会員になりました。真実の生き方を知った者におきてくる心の動きに「自分だけが喜びの生活をしていては申し訳ない。もっと多くの人々にこの喜びをお知らせしたい」という気持ちがあると思います。これを抑え切れない人々が、宣教師になって出て行くのだらうと思います。モルモン経を読んだ時、特に心に残った聖句があります。

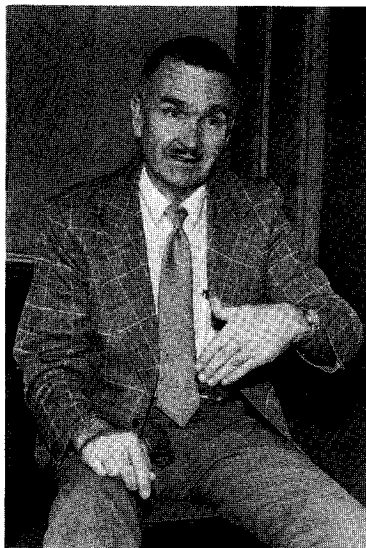
それは「主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以ってある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである」です。伝道するために「私には何か備えられているのだらうかと考えていた時、仕事のことが頭に浮かんできました。タクシーには、一日70人位の人々が乗ってきますので、この人々に福音を伝えようという気持ちが強まってきました。主は伝道をするために、「私をタクシーの運転手に召されたにちがいない」と思うようになってから、乗ってくるお客様の様子が変わってきました。将来、教会員になる可能性をもった方々が、たくさん

乗ってこられます。「私もクリスチャンです」という人とか、福音に関心のある方々がよく乗ってこられます。もちろん反感を持っている人々もいます。しかし「ミッション・スクールを卒業して、今でも神の存在を感じている人」とか「学生時代の先生がモルモンで、誘われて行ったことがある人」や、「友人にモルモンがいる人」も乗ってきます。「遊びにきた子供のお友達がモルモンで、おやつをあげてもお祈りして食べるのを見たというお母さん」にも会います。また「家族や友人に亡くなられた方がいて、死後の世界について関心を抱いている人」にも接します。主はこのような人々を選んで私の車に導かれるので、皆さんに神様の实在や真実の教会の名前を知らせながら走ります。

最初はチラシをお渡ししていましたが、それだけでは不十分になり、今は「家庭の夕べ」の本や、「改宗談」を用意しています。そして真理によって自分がどう変わったかを話すようにしています。まるでタクシーの中で「証詞会」をしているようなものです。お話のリズムが会い、調子のでた時や、道が混んで時間がかかる時は、讃美歌も歌います。一番良く歌うのは「家庭の中に」です。仙台のタクシーで讃美歌までサービスする車は、ちょっといいと思いますが、若いお母さんたちにはこの讃美歌が効果的です。まだまだ微力ですが、自分の環境を生かした「自分にできる伝道」をさらに続けていきたいと思っています。

教会員になる以前は、乗客の中にこわい暴力団員もいました。教会員になってから、制限速度を守る安全運転を励行していますが、以前と比べて、長距離のお客さんや、混雑しない方面へ行く人々が多く乗ってきます。また、身障者、お年寄り、身重の奥様など、ゆっくり走る車を探しておられる人々にもよく出会い、皆さんから喜んでいただけます。

神様が生きていらっしゃる、ひとりひとりに一番良い方法で導いておられることを証します。



恐竜研究の世界的権威  
ジェームズ・A・ジェンセン兄弟に聞く

## 世界最大の恐竜を 発掘！

—アメリカ・コロラド州にて—

恐竜研究の世界的権威として知られるブリガム・ヤング大学のジェームズ・A・ジェンセン兄弟（脊椎古生物学博士）が日本テレビの招きで去る10月22日、来日しました。ジェンセン兄弟はこれまで南極大陸をはじめ、3つの大陸を探検し、数多くの化石を発掘しています。この夏も、コロラド州で世界最大の恐竜（全長24m、体高18m）を発掘し、その長さ約3メートルもある肩甲骨の化石を持って来られたのです。

来日の目的は、11月17日放映された日本テレビの番組、土曜スペシャル「決定版、恐竜のすべて」に出演するためでした。

滞在中、東京ステーションでも講演が持たれ、古生物の謎を知ろうと集まった多くの人々の興味をかりたてました。

私たちはジェンセン兄弟の忙しいスケジュールの合い間をぬって宿泊先のホテルに彼をたずね、いろいろお話を伺ってきました。

以下はそのインタビューの内容です。

本誌記者：恐竜の研究をはじめられた動機は何でしょうか。

ジェンセン兄弟：子供の頃からいろいろな石や植物を集めることが大好きでした。やがて大きくなって、古生物の化石を集めるにいたり、その関心がますます高まってい

きました。言うなれば、子供の時からの興味がそのようにさせたのではと思います。

本誌記者：恐竜の研究をはじめられてどのくらいになりますか。

ジェンセン兄弟：25年前、自分の手で発掘したものを研究したのが最初です。現在はブ

リガム・ヤング大学で教えていますが19年前まではハーバード大学の博物学会の会員としてその研究をしておりました。

本誌記者：今までの化石の発見数はどのくらいになりますか。

ジェンセン兄弟：部分的に少しずつ発見しておりますが、3000以上にのぼると思います。

本誌記者：今回の世界最大の恐竜を発見された時のお気持ちは？

ジェンセン兄弟：今回の発掘場所はコロラド州のドライメサというところです。どのくらいの化石が出てくるかわからないということでもう5年も前から、発掘作業を続けております。世界最大の恐竜を発見した時は非常に興奮し、うれしさでいっぱいでした。次の作業がほんとうに待ち遠しい気持ちでした。

本誌記者：恐竜はこの地上に広く生息していたのでしょうか。

ジェンセン兄弟：恐らく世界中に分布してい

たと思います。今回ののはロッキー山脈の地殻の隆起によって発見されたものです。

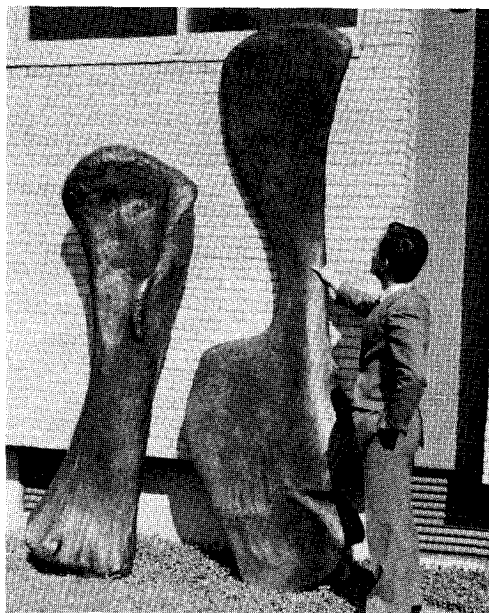
本誌記者：このたび、日本テレビの招きで来日されたということですが……。

ジェンセン兄弟：そうです。日本テレビで企画される番組に出演のためです。このために日本テレビのスタッフの方々が7月よりアメリカに來られて私の発掘作業や研究をずっと取材されてきました。今回はその最終的な打ち合わせやフィルム撮りが目的だったのです。

本誌記者：最後にジェンセン兄弟の末日聖徒としての証をお聞かせいただけますでしょうか。

ジェンセン兄弟：私はこの研究をしながら、地球の創造がほんとうに神さまのはからいでなされたということを強く感ぜざるを得ません。この地球が創られたのは恐竜のためでも、その他の動植物のためでもありません。私たち人間のためにつくられたのです。私は人間の始祖はさるではなく、アダムとイヴであることを信じております。そして科学と聖典は何らの矛盾もないことも知っています。私は古生物の研究をして、そのことがはっきりとわかってきました。そればかりかこの地球の歴史を研究するにつれて、福音の奥義とその計画のすばらしさに、心をひかれるのです。

本誌記者：興味あるお話、どうもありがとうございました。



(注) 写真の化石は現在、新宿の国立科学博物館の分館に保存されています。将来、上野にある本館に移し、展示される予定です。

さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。

すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照らしたので、彼らは非常に恐れた。

御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。

きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」

（ルカ2：8—11）